閑山

かんざん

第28号

寺報　**中尊寺**

目次

寺報　グラビア
一音所覃　千界不限　　貫首　奥山　元照　書
一音の覃ぶ所　千界を限らず
　―平和を願う鐘の音―　奥山　元照　8
伝教大師と中尊寺　菅原　光聴　12
第六十一回平泉芭蕉祭全国俳句大会
　特別講演
　「芭蕉の風景」へ　小澤　實　18
戸津説法聴聞の思い出　破石　晋照　33
「面　影」に会う　佐々木邦世　36
〈再録〉「復興　信じています」
　ドナルド・キーン先生　卓話　及川　真紀　40
平泉の外の「平泉の文化遺産」　菅原　年　48
父を思う　破石　晋照　51
関山植物誌〈13〉　52
紅葉銀河　―ちはやぶる神代も聞かず―　59
風信／語録（郵便受けから）　佐々木五大　60
紅葉銀河の催事から　62
陸奥教区一隅を照らす運動
　托鉢会に参加して　清水　秀法　64
「平泉の文化遺産」関連略年表　北嶺　澄照　79
新刊紹介　81
一枚の写真から〈5〉　87
関山句嚢・歌籠　98
御神事能番組　99
陸奥教区宗務所報　101
浄財御奉納者　御芳名　102
赤堂稲荷鳥居建立寄進　御芳名　102
不動尊篤信御奉納者　御芳名　105
執務日誌抄
〈表紙〉重要文化財　千手観音菩薩立像
　観音院蔵

「諸仏摩頂の場（にわ）」　奥山元照貫首

清衡の願文の意の大文字　遠藤　梧逸

中尊寺望古台

平泉大文字送り火
（東稲山　令和４年８月16日）

能「枕慈童」（令和４年11月３日）
秋の藤原まつりでは２年ぶりに中尊寺能が執り行われた。

平泉総社神輿渡御（令和４年７月17日）

磐井清水若水送り（令和５年１月１日）

東南寺にて説法の様子（令和４年８月22日）

地元園児による「謡」（令和４年11月３日）
平泉二葉きらり園の園児35名元気よく。

骨寺村荘園中尊寺米納め（令和４年12月11日）

紅葉銀河（令和４年10月29日～11月13日）

貫首　揮毫

大節分会（令和４年２月５日）
新型コロナ感染症蔓延防止の観点から豆撒き・抽選会は行わず、護摩供のみ執り行われた。

寒修行結願の日（令和４年２月３日）

一音の覃ぶ所　千界を限らず

―平和を願う鐘の音―

中尊寺　貫首　奥山元照

世界中にコロナ感染が広まり、パンデミック（感染爆発）と呼ばれ大流行がおこりました。そして三度目の冬を迎える中、一時は収束の兆しが見えたこともありましたが、未だ完全に収まるまでには時間がかかるものと思われます。一方、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が令和四年（二〇二二）二月二十四日に勃発し、ウクライナの各都市では子どもを含めた多くの民間人が犠牲となり、大勢の市民が国外へ避難する中、毎日のように両国兵士が命を落とし傷ついていることが報道されています。誰もが心を痛め、即時終結を強く願っているものであります。

平安時代の中頃、陸奥の国では、前九年・後三年合戦という長年にわたる戦いの間、多くの尊い命が失われました。その悲惨な戦いを二度と起こしてはならないという誓いを立て、初代藤原清衡公が、この平泉の地に、平和な浄仏国土を建設することを願って建立されたのが中尊寺です。

中尊寺の成り立ちを知るうえで欠かせない資料に、清衡公によって発願された「中尊寺建立供養願文」があります。「願文」とは、施主の願意が書かれた文書で、実際の法要などで読み上げられたものです。

その清衡公がお唱えになった願文の有名な一節に、「一音の覃ぶ所　千界を限らず　苦を抜き楽を与え　普く皆平等なり（打ち鳴らされる梵鐘の音は、あらゆる世界に響き渡り、全ての人々を等しく苦しみから救い、悟りの楽しみを与えてくれるのである）」とあります。この梵鐘の音には、清衡公をはじめ、戦の無い平和を願う陸奥の国の人々の思いが込められていたのだと思います。

この中尊寺の旧鐘楼の梵鐘は、康永二年（一三四三）、金色堂別当頼栄の発願により鋳造されました。そしてその梵鐘銘には、「関山に響く暁の鐘は迷いの世界から目覚めさせてくれる　それは霊鷲山の風が私たちの煩悩を払い　心を惑わす魑魅を打ち砕いてくれるように　この鐘の音がこの迷いの世界に行きわたり　死者の霊魂の眠る世界まで達するように」との一節が刻されています。

この旧梵鐘の鐘の音の響きにも、人々の心を清め、無念の死を遂げた人々への鎮魂の願いが込められてきたのです。

そして約八百年の間、その願いを込めて撞かれた撞座は大きく窪み、これ以上鐘を撞くことが難しくなりました。昭和五十年、中尊寺中興第二十五世今春聽（東光）大僧正御貫首の折、一山住職発願して、現在の梵鐘と鐘楼が新たに建立されました。今御貫首が揮毫された梵鐘の銘文の一節には、「今

新たに梵鐘を造る　関山は雪で白く覆われ　光堂には月が輝いている　心静かに耳をすませば　そこには極楽浄土が現れる　どうぞ聴いてください　その鐘の音は　私たちを煩悩から目覚めさせ　汚れた心を洗い流して　未来永劫すべての人々に　この梵音（ぼんのん）が響き渡りますように」と流麗に、また力強くその梵鐘には刻されています。

現在、中尊寺本堂前の鐘楼では、毎日午前六時・正午・午後五時（冬）六時（夏）それぞれ十回打鐘されています。

梵鐘の梵とは「神聖で清浄なもの」を意味します。鐘の音を「梵音」とも言い、梵鐘の音は仏様の声であり、そのお寺の御本尊様のお説法を表すものであるといえます。

鐘の音を仏様の声と思い、その言葉無きところに聞こえてくる、お釈迦様の教えに心の耳を澄ませてください。

この平和を願う鐘の音と共に、一日も早く世界各地の紛争や戦争が終わり、幸せな日々が全世界に訪れることを心よりお祈り申し上げます。

□　中尊寺新梵鐘銘文　今春聽大僧正揮毫（現在の梵鐘に刻されている原文）

中尊寺ハ　藤原散位　清衡ニ依リテ創建サレ　弘ク陸奥ニ　天台ノ梵音ヲ　轟カセリ
然ルニ爰ニ　星霜八百年　漸ク磨滅ノ危フキニ瀕セリ　当山ノ緇徒（しと）　コレヲ哀シミ　銅ヲ鋳テ以テ新鐘ヲ造ル　即チ関山ノ雪白ク　光堂ノ月圓（まどか）ニシテ　心耳ヲ澄マセバ　極楽浄土現前ス　君聴ケ　煩悩ノ睡リヲ覺シ　六塵（ろくじん）ノ垢ヲ洗ハシメ　以テ盡未来際ニ至ルマデ　普ク無辺ニ　逮（およ）バシムト

昭和五十乙卯吉月吉日　　願主中尊寺東光坊春聽

伝教大師と中尊寺

菅原光聴

去る令和三年（二〇二一）は日本に天台宗を開かれた伝教大師最澄一千二百年大遠忌でした。昭和三十三年（一九五八）に比叡山延暦寺より分灯した「不滅の法灯」の照らす中尊寺本堂では、毎年大師のご命日にあたる六月四日、「伝教大師御影供」が厳修されています。

不滅の法灯と中尊寺

延暦四年（七八五）大師は東大寺において具足戒を受戒されると比叡山に籠もり、「伏して願わくば、解脱の味独り飲まず、安楽の果独り証せず。法界の衆生と同じく妙覚に登り法界の衆生と同じく妙味も服せん」と『願文』に誓願されました。そして同七年（七八八）に一乗止観院を建立して自ら刻んだ薬師如来を安置されました。これがのちの延暦寺根本中堂の起源であり、この時薬師如来の宝前に灯されたのが「不滅の法灯」です。「明らけく　後の仏の御世までも　光りつたへよ　法のともしび」、それは五六億七千万年後といわれる弥勒如来下生の御代までも仏法を灯し続けよとの願いでした。

比叡山から遠く離れたみちのく平泉地方にも弥勒下生の時まで仏法を絶やさぬとの願いから経典が埋納された「経塚」が多く伝えられています。世界文化遺産の構成資産ともなっている「金鶏山」は特に有名で、さらにその北数百メートルの所には仏弟子・摩訶迦葉が弥勒下生を待望して入定したと伝えられる古代インド・マガダ国の鶏足山の信仰に由来する「鶏足洞」の古跡も伝えられています。

そこには現世のみならず、過去世から未来世の三世にわたる長い歳月、仏法を護り伝える営みを続けてゆく決意が込められています。

多田厚隆師は、「心の働きとして一貫して続いていることを精進と言う」「仏法では、この精進というのが一番大事なのです」と、中尊寺貫首をお務めになられた当時の講述録（『「法界次第」の講述　止観明浄（二）』多田孝正・多田孝文編）に述べられています。

伝教大師御影供（中尊寺本堂）

昨今のコロナ禍においては「続ける」ということの難しさを痛感します。経済活動はもちろん、身近な催事や人生儀礼にいたるまで中止や縮小を余儀なくされる毎日です。生きてゆくこと自体、あまりにも多くのことを諦めなければならないのです。そうした中、「一千二百年」の継続、「五六億七千万年」精進を続けて行くということをどのように受け止めればよいのでしょうか。

伝教大師の灯された法灯に手を合わせる時、厚隆師が「心の働きとして」と説かれたように、明るきときも暗きときも常に心の中に灯し続けるのが「不滅の法灯」ではないかと感じます。今進むべき道が閉ざされても、目指す場所が照らされていれば、いつかはそこへ向かう道が通じて行く。

九百年前、清衡公は前九年、後三年の戦乱で疲弊した東北の地に、過去の冤霊供養、現在の報恩感謝と「諸仏摩頂の場」の建設、未来の万類安寧を願って中尊寺を建立し、それが二代基衡公の毛越寺、三代秀衡公の無量光院へと受け継がれました。これら寺院の本尊である釈迦、薬師、阿弥陀如来に導かれ、過古・現在・未来が列なる「今」、心に法灯を照らし精進を続けることで、それが「過去世」「現

世」「未来世」にまで敷衍されて「後の仏の御世」へと向かって行くのではないでしょうか。

伝教大師と中尊寺の本尊

平成二十五年（二〇一二）に新たに造立された中尊寺本堂の本尊・丈六釈迦如来によせて多田孝文師は「この釈迦本尊は、法華経の寿量品第十六によったもので、この世に存在する様々な仏・菩薩等は、人の心が異なるように、それぞれに相応しい姿に化現したものなのです。その本体が伝教大師の示された、三身具足の釈迦如来であり、天台の本尊です。」と述べられています。（『一条の光　中尊寺本堂新本尊開眼法要記念誌』）

大師は『内証仏法相承血脈譜』を著し、天台宗の仏法相承（伝法）の系図を次の五つの法門（分野）に整理し、それぞれの本尊を示されました。

①「天台法華宗 相承師師血脈譜」（法華円教）
……「常寂光土第一義諦久遠実成 霊山浄土多宝塔中 大牟尼尊」

②「天台円教 菩薩戒相承師師血脈譜」（菩薩戒）
……「蓮華台蔵世界赫赫天光師子座上 盧舎那仏」

③「達磨大師付法相承師師血脈譜」（禅）
……「垂迹 釈迦大牟尼尊」

④「胎蔵金剛両 曼荼羅相承師師血脈譜」（純密）
……「胎蔵曼荼羅毘盧遮那如来」と「金剛界毘盧遮那如来」

⑤「雑曼荼羅相承師師血脈譜」（雑密）
……「金剛道場大牟尼尊」

「天台法華宗」、つまり『法華経』の法門の本尊が「常寂光土第一義諦霊山浄土久遠実成多宝塔中大牟尼尊」とされているのです。「常寂光土」、「第一義諦」、「久遠実成」、「多宝塔中」の「大牟尼世尊」（釈迦）とは何を意味しているのでしょうか。

釈迦は『法華経』前半の説法（「迹門」）で「すべての衆生は仏になれる（三乗即一乗）」という教えを説き明かされます。すると巨大な宝塔が現れ虚空にそびえ立ちます。釈迦は神通力をもって「十方分身諸仏（十方世界で仏法を説く分身の諸仏）」を一ヶ所に集め多宝塔の扉を開くと、塔中に多宝如来が現れ釈迦の説く教えの真実性を証明します。そして座を分かって釈迦に勧め、塔中に二仏が並座します。釈迦は聴衆をその会場に引き上げ、説法の場が霊鷲山から虚空へと移されるのです。釈迦は「其れ能く此の経法を護ることあらん者は、則ち為れ、我及び多宝を供養するなり、此の多宝仏、宝塔に処して、常に十方に遊びたまうは、是の経の為の故なり、亦復諸の来りたまえる化仏にして、諸の世界を荘厳し、光飾したまう者を供養するなり、若し此の経を説かば、則ち為れ、我と多宝如来と、及び諸の化仏を見たてまつるなり」と、『法華経』を護持する者は「釈迦」「多宝如来」「化仏（十方分身諸仏）」を仰ぎ見ることができると説いています。（「見宝塔品」）

そして説法は後半の「本門」へと進み、「如来寿量品」にいたって明かされたのは「釈迦が現世に出現して悟りを開いたというのは仮の現象に過ぎず、実は限りない過去にすでに成仏し、現在に至るまで教えを説いている」という「久遠実成」の真理でした。

また『法華経』の結経といわれる『観普賢菩薩行法経』には「釈迦牟尼をば毘盧遮那遍一切処と名づけたてまつる。其の仏の住処を常寂光と名く。」と説かれます。これは懺悔の行法を修せんとする行者に対して空中の声が示した言葉で、釈迦が法身（真理の本体）・毘盧遮那と一体であり、常寂光土（真理そのままの浄土）に住処していると明かされたのです。つまり毘盧遮那と一体の釈迦の教えもまた「第一義諦」（真理そのままの教え）であるといえるのです。

天台大師智顗は『法華文句』「巻八下釈見宝塔品」の中で、仏の「三身」（法身・報身・応身）について「若し即ち此れ（三身）は是れ（「見宝塔品」の）三仏と謂わば、未だ体を尽くさざるなり。」と前置きした上で、「見宝塔品」においては「多宝は法（身）仏を表し、釈尊（釈迦）は報（身）仏を表し、分身（諸仏）は応（身）仏を表す。三仏は三なりと雖も、しかも一異ならず」としています。また同「巻九下釈寿量品」では「法身の如来を毘盧遮那と名く、此には遍一切処（一切処に遍満していること）と翻ず、報身の如来を盧舎那と名く、此に浄満（清浄に満ちていること）と翻ず、応身の如来を釈迦文と名く、此に度沃焦（煩悩から救うこと）と翻ず」と説かれています。（カッコ内筆者補注）

① 真理の本体である「法身」＝多宝如来（全身宝塔）・毘盧遮那如来（遍一切処）

② 慈悲の行（菩薩行）の報いとしての仏格を現す「報身」＝久遠実成の釈迦・盧舎那如来

③ 現世に応じて現れた「応身」＝十方分身諸仏（十方世界で法を説く分身の釈迦）

という三身の仏のあり方がそのまま「三なりといえども、一異ならず」、つまりは「三身具足」の「常寂光土第一義諦霊山浄土久遠実成多宝塔中大牟尼尊」であり、天台法華宗の本尊とされるのです。

さらに『観普賢菩薩行法経』には常・楽・我・浄の四徳波羅蜜に住して十方の仏を観じることにより「十方の仏、各々右の手を申べて行者の頭を摩でて、是の如き言を作したまわん。善哉善哉、善男子、汝今大乗 経を読誦するが故に、十方の諸仏懺悔の法を説きたまう。」と、応身である十方分身諸仏が行者の前に現れてその頭を摩で、懺悔の法を説示する、いわゆる「諸仏摩頂の場」の情景が示されています。さらに「既に懺悔し已て当に是の語を作すべし、南無釈迦牟尼仏・南無多宝仏塔・南無十方釈迦牟尼仏分身諸仏と。是の語を作し已って、遍く十方の仏を礼したてまつれ、南無東方善徳仏及び分身諸仏と。」と、「釈迦」「多宝」「十方分身の釈迦」の三身仏を礼拝し、続いて次第に十方・三世の諸仏を礼拝すべきことを説きます。この懺悔の行の功徳によって「我が身及び多宝仏塔・十方分身の無量の諸仏・普賢菩薩・文殊師利菩薩・薬王菩薩・薬上 菩薩を見たてまつることを得ん。（中略）但大乗 方等経を誦するが故に、諸仏・菩薩昼夜に是の持法の者を供養したまわん。」と、行者は釈迦如来（報身）、多宝仏塔（法身）及び十方分身の諸仏（応身）の三身仏に見えて加護を受けることができるとされています。

天台大師によって始修され、現在も天台宗の日課勤行として修される『法華懺法』は『法華経』および『観普賢菩薩行法経』に基づき、普賢菩薩を観じ、釈迦如来と多宝如来、十方分身の諸仏・菩薩に敬礼して六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）の罪を懺悔することがその行法の中心となっています。

天台の教えにおいては、三身具足の本尊を礼拝することと無量の諸仏・菩薩を礼拝することは異なることない一貫した行になるのです。

『吾妻鏡』によると、中尊寺の伽藍は中央に多宝寺が建立されて釈迦・多宝如来を安置し、釈迦堂には百余体の釈迦如来を安置したといいます。これらの伽藍は、天台大師から伝教大師へと受け継がれた「天台法華宗」の三身具足の本尊観に基づき、法華行者の目前に現れる「虚空会」の情景、法身仏の多宝如来（多宝仏塔）、報身仏の釈迦如来、応身仏の十方分身諸仏が表現されているのです。

また同じく『吾妻鏡』に記される「両界堂両 部諸尊」は、伝教大師の示された「胎蔵金剛両曼荼羅」つまり天台密教の法門の本尊であり、「二階大堂」「金色堂」などの浄土教伽藍は、中尊寺開山と伝承される慈覚大師円仁へと受け継がれながら発展した顕密一致の天台教学を反映したものと考えられます。

『法華経』を信仰したみちのくの詩人・宮沢賢治は大正十年（一九二一）、比叡山を詣でて伝教大師の遺風に触れ、「ねがはくは　妙法如來　正徧知　大師のみ旨　成らしめたまへ」と詠じました。そして同十五年（一九二六）、『農民芸術概論綱要』で「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない　自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する　この方向は古い聖者の踏みまた教へた道ではないか」と述べています。この言葉は賢治の「願文」といえるでしょう。

伝教大師がおよそ一千二百年前、『法華経』に説かれる「皆共成仏道」を誓われた『願文』、三世を照らす「不滅の法灯」、そして「稽首十方常寂光　常住 内証 三身仏」（『顕戒論』）と礼拝された、三世十方（時間と空間）を包摂する天台の本尊の教えが、奥州藤原氏、そしてみちのくの大地に生きた詩人の心へも受け継がれたのです。

（執事長）

第六十一回平泉芭蕉祭全国俳句大会　特別講演

「芭蕉の風景」へ

講師　小澤　實　先生

ご紹介に与りました小澤でございます。

言葉というものは、私たちが気軽に使っているのですけども、それはみな亡くなった人たちが苦労して造り出して今にあるものだと思います。僕の俳句論の中心のところを紹介していただきまして嬉しく思っています。

「芭蕉の風景」という連載を十七年、新幹線所載の雑誌「ひととき」で続けてまいりました。それを上下二冊本にまとめるのに三年かかりました。計二十年を費やした本が去年出来上がりました。その翌年に『おくのほそ道』の中心となる此処、平泉で皆さんに芭蕉について話す機会を与えられたというのは大変感激であります。

今日は、まず芭蕉が平泉で詠んだ二句を読み返してみたい。それからレジュメをご覧いただきながら進めたいと思います。

「芭蕉の風景へ」と題しまして、これまでの多くの先生方との出会いを紹介しながら、著書『芭蕉の風景』のエッセンスのようなものをお話できればと思っています。

『おくのほそ道』にはいくつかの目的地がございました。まず、挙げられるのは松島、象潟ですね。「松島」、「象潟」という芭蕉が心惹かれた西行に関わる歌枕が目的地でありました。それから、「出羽三山」という聖地も大変思い入れのある場所だったと思います。

そして「平泉」です。芭蕉が敬愛した西行が二度訪れている地であり、そして芭蕉も好きだった、源平時代を代表する源義経の最期の地でもありました。そういう多面的な目的地をもつところが、『おくのほそ道』の魅力になっていると思うのです。その中でも特に、「平泉」は芭蕉にとって、他とは別な重みをもった土地であると思います。

講演の様子

それではまず、芭蕉の句を読みなおしてみたいと思います。

夏草や兵どもが夢の跡

芭蕉の名句といえばこれが挙がると思います。生涯十句の中には必ず入ります。もっと絞れる気もします。私は、芭蕉の生涯三句の中にも入れますし、『おくのほそ道』の中で一句を選ぶとなれば、当然この句を挙げると思います。

芭蕉の大きな業績というものが幾つかあると思うのですが、その最大の業績っていうのは、芭蕉が句の主人公として、自分自身というものをテーマにしたということだと思います。

私たちの俳句は自分を詠むもの、ということが前提で皆さんもお作りになっている。自分をいかに見つめていくかということが、とても大事なことなのです。芭蕉以前の俳句の世界を見てみますと、それはなかったのです。ことばの遊戯でした。自分の生き方を見つめる、生き方を詠むことを一

番初めにやったのが、芭蕉だったと考えられます。その時に参考にしたのが李白、杜甫の漢詩であり、西行の和歌だったと思っています。

自分を詠むという、私たちにとっては当たり前のことなのですけれども、それを創り出したのが芭蕉でした。

そして、二番目の発明というところで、取り合わせというものがあります。私たちも普段使っていますけれども、季語とそれ以外のフレーズで取り合わせる。これも私たち現代の俳人達がずっと作っている。芭蕉の遺産を利用させていただいているものの一つだと思います。

取り合わせの発明者である芭蕉が、最高傑作の句を作ってしまったというのが「夏草や兵どもが夢の跡」なのです。これは、〝夏草〟が、どうしようもなく効いていますね。これが他の季節の草だったらダメですよね。秋草や冬草だと〝兵どもが夢の跡〟に近すぎるし、春草だとちょっと甘くなってしまう。これは〝夏草〟という苛烈な草でなければいけない。その〝夏草〟を選んだことによって〝兵〟の生きることの激しさ、そして無念の死というものが活きると思います。

芭蕉は、取り合わせ俳句というものを発明して、そして即、取り合わせ俳句の最高傑作を作り出したということが言えるのではないかと思います。

これ以来、取り合わせ俳句は膨大な数作られてきましたけれども、この〝夏草や〟の句の取り合わせを、果たして超える句は作られたのか、ということになると疑問を呈さざるを得ません。この句こそが最高傑作の取り合わせ俳句と言って良いと思います。

そしてこの〝兵ども〟は直接的には義経主従を指すわけですが、そこから様々な戦争での死者にまで広がっていきます。第二次世界大戦でも沢山の方々が戦死されました。それ以後も世界で戦争がありまして、今もウクライナで大変な戦争が続いています。

いま、まさにロシアの〝兵ども〟が侵入している訳です。そういう所まで覆い尽くしている、恐ろしい名句と言えると思います。

芭蕉は、この句を書いたときに曾良の句を添えています。同行者、曾良の句を加えることによって奥行きを出しています。

卯の花に兼房見ゆる白毛かな

ちょうど卯の花が咲いている。その白さに兼房という義経のそばにいた老武者、乳父というのですけども、義経の子どものお世話をしていた老武者を曽良は詠んでいます。

『義経記』の中に義経の最期に兼房が登場してまいります。『義経記』においては、兼房という人が義経と北の方を自害させて、その上で二人の子供を殺して館に火をかける。そして敵を脇に挟んで自害する。そういう死を描いています。

大河ドラマで最近、義経の死が描かれました。今回のドラマの義経は非常に新鮮で、新しい義経像を描いていたのですけども、その中では兼房は出てきません。大河ドラマのあらすじが『平家物語』からとられている。その平家物語をさらに進めているのが『義経記』で、より泣かせる形にしている訳ですね。乳父として非常に子供を愛しみ育ててきた人が、その子供を二人殺さなければならない。その悲しみを思わせて泣かせるという所があります。卯の花の句は、芭蕉の名句に添って、〝兵ども〟は義経主従に限らせるというはたらきもしているように思います。

芭蕉はもう一句、名句を残しています。

五月雨の降り残してや光堂

芭蕉がまさに、この句を作った当日に、作った場所でこの句について話せるというのは非常に光栄に思います。ずっと五月雨が続いていたのですけれども、芭蕉が平泉を訪ねたとき、この日は丁度晴れたのですね。梅雨であって晴れる。まさに今日みたいな日ではないでしょうか。

この句は原句がありまして、芭蕉はどんどん句

を直していきます。それこそが芭蕉の力なのだと思いますけども、作りっぱなしにしないのですね。自分が作った句を舐めるように舌頭に千転して、推敲していくのです、この句も最初は

五月雨や年々降て五百度

と作っています。

五月雨が降って五百回。なんで五百回かというと、西行が亡くなって四九九年後なのですね。それで芭蕉は西行の五百回忌を修するという気持ちをもって、おくのほそ道を辿るというふうに考えられています。これも平泉が一番重い地としてあるということの証の一つだと思います。西行という人への敬愛の思いを、光堂という西行が確かに額ずいた場所を通して表現している。そういう俳句であると思います。

西行は秀衡と遠縁だったのです。それで若い時の第一回目には歌枕を訪ねる旅で訪れる。そして二度目は東大寺が平家に焼き討ちされてしまって、その再建費用を援けてもらうために来たのでした。芭蕉は、西行も義経もとっても好み、敬愛してましたけれども、西行はむしろ平家派なのですね。清盛と近い人なので、木曽義仲とか義経は敵方だったんですね。芭蕉はその辺を理解してないのですけども、実は嫌い合っていた二人を敬愛した。その矛盾も面白いと言えば面白いわけです。

それでは、「芭蕉の風景へ」の本題に入ってまいります。芭蕉の風景にあたっては様々な先生方にお世話になりました。まず、大学で東明雅先生に出会いました。

私、高校まで文学青年でした。小説は大江健三郎が好きでしたが、現代詩は吉岡実が好きでした。小説を書いたり詩を書いたりする文学青年だったのですけれども、信州大学で東明雅先生に出会いました。東先生は元々西鶴学者で西鶴の本をたくさん出されていたのですけれども、信州に来て根津芦丈という旧派の俳人と出会って。それで、連句の面白さに出会う。連句に夢中になられたので

すね。

授業では『おくのほそ道』の演習というものをやりました。けっこう厳しく鍛えられました。その先生から連句会に出てみないかと言われたのです。連句会というものを月一回公民館でやっていると言われまして。近世文学、江戸時代の文学の研究の役に立つのじゃないかと言われて出てみました。そしたら、教室での厳しさとは打って変わって、すごく優しい先生だったのです。

連句は歌仙という三十六句連ねる形式なのですけれども、その表六句が終わると先生がお酒を注いでくれるのです。一升瓶から茶碗酒を注いでくれて、その茶碗酒に魅かれて連句会に出るようになりました。

その席に、宮坂静生先生（俳誌「岳」創刊主宰）がおられて、発句を作ってみないかと言われまして。

当時、宮坂先生は藤田湘子の「鷹」に所属していました。宮坂先生に一週間に二十句くらい大学ノートに書いていって見せた。そしていくつか丸を付けてもらって、その丸の付いた句を「鷹」に投句するようになりました。それが僕の俳句のスタートです。

東先生は連句復興の第一人者でした。この方に出会えたからこそ連句も俳句も始めることが出来ました。『芭蕉の風景』で芭蕉に挑戦するように自分の俳句を書き足すということは本当に恥ずかしいことでしたけれども、今となっては、やって良かったなと思っています。

『芭蕉の風景』は発句だけではなく連句も付句も取り上げています。そういう発想も東先生に就いたからこそ出来たことではないかと思っています。東先生の『連句入門』というのは本当にオーソドックスな本ですね。そして『芭蕉の恋句』というのは非常に瑞々しい。俳句というのは基本詫び寂びなのですけども、恋の句というのはとても瑞々しいものがあります。そういう芭蕉の新しい世界を描いた本。名著ですのでお勧めいたします。

それから、更に俳諧の勉強をしてみようと思いまして、大学院に進学しました。尾形仂先生が

成城大学にいらっしゃると知りまして進学を志しました。東先生の「おくのほそ道」の演習の時のテキストが、角川文庫の尾形先生のものでして、文庫本ながらすごく詳しく書いていて、さらに学びたいと思った訳です。尾形先生には俳諧を学びたいと思ったんですけれども、人生なかなか上手くいきません。尾形先生のその頃の関心が森鴎外だったんですね。レジュメに書いてありますように森鴎外の研究をなさっていた頃で、私、五年間大学院にお世話になったのですが、五年間ずっと森鴎外の晩年の歴史小説、その中の一つ『北条霞亭』の研究をしていました。北条霞亭という江戸後期の漢詩人の自筆書簡、これを解読するということをやりました。共同研究として、五年間ずっと俳諧は勉強せずに、江戸時代の詩人の手紙や詩稿の解読をやっていました。その時はもう本当に自分の無力を知るばかりだったのですけれども、今になるとちょっと懐かしくなる時があります。

この尾形先生、色々業績があるのですけども、『おくのほそ道評釈』があります。おくのほそ道の評釈は沢山出ていますけども、その最高峰というべきではないかと思います。尾形先生は一語一語辞書を引けと言う教えですね。『日本国語大辞典』を引けということでした。言葉と向き合って、多くの出典を見つめて古典と対峙していけということを教わってきました。尾形先生と出会ってなかったら、私の『芭蕉の風景』はもっとずっと薄っぺらくなっていたのではないかと思います。

なかなか芭蕉について新しいところが言えないのですけれども、一つ僕にとって新しかったのが、尾形先生に報告したいなと思ったのが、レジュメに書きました遊行柳のところです。遊行柳は『おくのほそ道』で代表的な句なのですけれども、

田一枚植えて立ち去る柳かな

という句が『おくのほそ道』の中でも難解な句とされてきました。〝田一枚植えて立ち去る〟、この主体は何かということが、いろいろ言われてきて、定まってなかったのですけれども、私は、この句

は西行の歌をふまえている、と思うのです。

道の辺に清水流るる柳陰
しばしとてこそ立ちどまりつれ

西行の代表歌といってもいい。非常に涼しげな歌ですね。陽がかんかんと照っている道を歩いていると、道の傍らに清水が流れ出していて、柳の木の影がある。そこでしばらくということで立ち止まって休んだ。夏の旅の休息の宜しきを詠んだ名歌だと思いますけども、ここに「しばし」とあります。この「しばし」という言葉を具体的にしたのが、この芭蕉の句ではないかと私は読んだわけです。

〝しばし〟というのは和歌的な抽象的な時間です。それを〝田一枚植えて立ち去る〟時間と、具体的にしたのが芭蕉の句の面白さだと思ったのです。それがおくのほそ道研究にとって新しいことが言えたのじゃないかと。尾形先生が亡くなられていなかったら、「どうでしょうか?」と伺ってみたいです。

次は、

（プロジェクターの写真）

これは仙厓ですね。江戸後期の禅僧である仙厓の禅画なのですけども、平泉に関わる禅画であります。上にいるのが義経です。そして下にいるのが弁慶ですね。そして弁慶が義経に向かって歌いかけ、呼び掛けている。五条橋の弁慶、義経出会いの場面です。ここで私が面白く見ているのが、義経が日の丸の扇を手に持って、弓を持っています。この絵はもしかすると壇ノ浦の戦いの七艘飛びを重ねて描いているのではないか。下の弁慶は、こちらを向いてにこやかにしている絵があるのですが、ここでは固まったように向こう側を向いている。この弁慶は高館の最期の死の瞬間を想像して描いているのじゃないか。仙厓という人の天才性が表れている絵だと思うのですが、いかがでしょうか。この仙厓の書を読み解きながら、尾形先生のゼミのことを思い出したりもしていまし

た。

（プロジェクターの写真）

私は趣味で古美術が好きで学生の頃から骨董屋さんに出入りするようになりました。青井義夫さんの店に出入りするようになって、ひと月に一回は伺っておりました。

この青井さんが、仏教美術、ことに平安期の美術が得意でした。平安期というのは柔らかな曲線とかが強調されるのですけども、その柔らかさの奥にある逞しさみたいなものを教えてもらいました。

現在まで四十数年、先輩として、先生としてお付き合いいただいてきました。

『芭蕉の風景』の隠れたテーマとして、芭蕉が見た仏像、寺というものは何があるのかというのが、私のとっておきのテーマになっています。その一番中心が中尊寺の「光堂」なのです。「三尊の仏を安置す」。けれども、「七宝散うせて」いた。芭蕉が、観たままをしっかりと書いています。

次、これは

（プロジェクター）

以前青井さんにわけて頂いた物の一つで、中尊寺伝来の螺鈿ということでした。花の形も柔らかく、そこにほどこした毛彫りもしなやかです。柔らかさの中に強さが秘められていて、十二世紀の日本の最高の技術というものがここにあると思って愛蔵しています。

（プロジェクター）

葛西敬之さん、先頃亡くなられてしまいましたが。ＪＲ東海の名誉会長でした。平成十二年の初めにこの当時社長であった葛西さんに、呼び出していただきまして面接を受けました。それから「芭蕉の風景」連載が始まったのです。

自分の句も沢山作りました。この雑誌が刊行される三カ月前に取材に行きます。三カ月前の句を「季語別芭蕉句集」から選んで、その取材をする。そして、その土地の物を食べて、そこに泊まってくる、ということを十七年繰り返してきました。

「夏草や」の号もこうして回りました。平泉にも三月に来たのです。ですから、今回この、芭蕉の季節に来られた喜びというのは非常に深いですね。ただ自分も句を作ってる訳で、芭蕉と同じ季に来ていたら、句は芭蕉に遠慮して伸び伸び出来なかったかもしれません。そういう点では良かったのかもしれませんね。

ところで、連載を続けてきまして大変ショックなことがございました。

こういう本が出たんですね。村松友次の『謎の旅人　曾良』です。曾良という俳人、神道家、旗本の要人、隠密…？と帯がついています。曾良は幕府巡見使随員として壱岐に行っていて、壱岐で死んでいるのですね。これはもう、曾良は隠密であって、その隠密と一緒に旅をした芭蕉という人は隠密のカモフラージュだったというのが正体じゃないかな、というのが私には感じ取れて…。芭蕉は隠密の可能性があるのじゃないかと、非常に萎える思いがしたわけです。なぜなら『おくのほそ道』は隠密のアリバイとして書かれたのではないかと思ってしまったからです。

続いてこんな本も出ました。光田和伸の『芭蕉めざめる』です。芭蕉は何故隠密になってしまったのかと。もう、ここでは芭蕉は隠密そのもので、これもショックだったわけです。

ところが、こんなことがありました。東大にいらした柴田元幸先生、ずっと「モンキー」という雑誌をやっていらっしゃいます。「モンキー」の英語版が出版されて、その記念の催しがありまして、ニューヨークに行きました。

ニューヨークの書店で催し物をやって、怖いもの知らずで私が英語でスピーチをやらせていただいたこともありました。そこでレベッカ・ブラウンさんというアメリカを代表する小説家にお会いしたのです。レベッカさんは芭蕉が好きで、芭蕉を訪ねて日本に来られたこともある人です。日本でも翻訳は多くありますし、雑誌「ユリイカ」で一冊特集も出版されています。

このレベッカさんにさっきの話をしたのです。芭蕉という人は「おくのほそ道」をやっているのだけれども、それは隠密のカモフラージュだったようで、何か悲しいですね、みたいな話をしたんです。そうしたら猛烈に怒られました。何を言っとるのじゃと。英語ですけども、怒られまして。芸術家と為政者の関係というのは難しい。芸術家が大きければ大きいほど為政者との関係というのはすごく難しくて、為政者をどうやって利用していくか。それもまた、芸術家の一つの在り方だと語られて、それで三人の芸術家を挙げてくれました。一人はドイツのギュンター・グラスという小説家。そしてロシアの作曲家ドミートリイ・ショスタコーヴィチです。そしてイギリスの小説家グレアム・グリーン。グレアム・グリーンは諜報部員だと言われていますけども。

こういう人たちというのは、体制というのを利用して、体制というのをだましだましながら、本当にすごい作品を残している。

芭蕉もまた、そういう存在だったと私に教えてくれたんですね。それを聞いて私は感心して、そして句を作りました。

グラス・ショスタコヴィチ・グリーン・芭蕉みどりの夜

東日本大震災の後で、テレビを付けると、怖い、日本では流れていない映像がずっと放映されていて、航空自衛隊の松島基地のヘリコプターが津波で流されている映像が繰り返し流されており、怖かったですね。そんなこともあって、アメリカ、カナダの人たちが心底、日本の被災地のこと、我々のことを慮ってくださっていました。

そのニューヨークは藤が咲いていて、緑がきれいで。「みどりの夜」と句を詠みましたけれども…。まさにこういう、芭蕉は世界的な存在であるということをレベッカさんに教えていただいた。ニューヨークに行ってよかったと思っています。

そして、レベッカさんに怒られたことで僕は、隠密という立場をはばかることはなくなりました。それがまた芭蕉の句を厚くしているように感じられるようになったのです。

次に、中沢新一さん、僕も『大人の楽しみ俳句入門』という本で対談をしています。

その中で、中沢さんにアニミズムということを教わったんですね。アニミズムというものは、宇宙にスピリットというのが流れているというのですね。このスピリットというものが百年単位で留まったところに大岩がある。そして十年単位で留まったところに大きな木がある。そして、もうちょっと短い単位で留まったところに動物や人間が現われる。そういう考え方で、縄文人やインディアンたちのものなのです。それもまた芭蕉も持っていた、ということを教えられました。

そうしますと、「おくのほそ道」の旅というのは、このアニミズムの表れを訪ねたかったんですね。おくのほそ道は、岩を訪ね、大きな木を訪ねる、そういう旅でした。

遊行柳も訪ねるし、武隈の松、多賀城の碑、立石寺の大きな窟も。アニミズムの命が留まったものとして解される。歌枕の旅というのも、奥にアニミズムを訪ねるという想いがあって…。奥行が感じられるようになりました。

それからこれも一つ、震災の後、須賀川に行って、これに気が付きました。

この須賀川で芭蕉は二句詠んでいます。レジュメをご覧ください。等窮宛てに次の句があります。

風流の初やおくの田植えうた

奥州に入って、田植え歌を聴いて、初めての風流と感じとっています。田植えを詠んでいるわけです。つまり、これは弥生までさかのぼる。

それに対して可伸という「世をいとふ僧」に、

世の人の見付けぬ花や軒の栗

と詠んでいます。

この可伸に対しての句は、世間の人の見つけな

い、軒に咲いてる栗の花、そこに美しさを見つけるんですね。

先ほどの稲作の句に対して、これは栗です。栗は、三内丸山で縄文人が栗を栽培していました。縄文を代表する木の実でした。そしてこの二句を並べているというのは、芭蕉は江戸時代の人でありながら、非常な感受性をもって、弥生の奥の様子まで見通せる人だったということを意味していると思うのです。

それから、

かくれけり師走の海のかいつぶり

という句も芭蕉が作りました。前述の中沢さんは『アースダイバー』という本を出されていますけれども、アースダイバーというのはインディアンの教えで、かいつぶりは洪水の後、底に潜っていく新しい泥を探って、持ち上げて、その泥から新しい世界を生む、そういう世界観を持っているのですね。それがもとでアースダイバーという言葉を使われているんですけども。芭蕉はまさにアースダイバーだと思われるということを中沢さんに話したくて堪りませんでした。

次に、小林達雄先生、縄文学者です。小林先生にはＮＨＫ俳句をやっているときに、ゲストでお世話になりまして。三内丸山のモニュメントが、夏至の太陽を受けて反射するよう作られているということを、教わったのです。

伊勢の二見浦の夫婦岩も同じようなはたらきをしています。夏至の太陽がその岩の間から反射しながら上がってくる。それがあることで伊勢は神聖な場所になった。

「おくのほそ道」というのは、江戸から出発して大垣で終わるというふうに言われていますけれども、結局、その目的地は伊勢だったと思うんですよ。このみちのくのアニミズムを体現した神秘的な縄文の地を経て、改めて伊勢の聖地を拝むための旅というのが、おくのほそ道の旅だったのではないか、ということを小林先生に教わったというふうに思ってます。

そういう様々な教えを、導きを経て旅をしてきました。ところが、連載が平成三十年の七月に打ち切られました。本当に寂しかったです、でもその後、コロナ禍になります。取材に行けなくなる。やめておいてよかった。想像で書かなくてよかったと、今は思っています。

そして、編集者海野雅彦氏がまとめてくれました。今までの連載というのは季節に合わせて句を時代としてはバラバラに出しているんですが、それを句が生まれた順にすべて並べなおしてくれた。それを見たとき、芭蕉の生きた、生のうねりみたいなものが迫ってくる感じがしました。これには驚きました。

そして、それぞれの時代に興味深いトピックが見られます。

まずは、貞門、檀林の時の句でみちのくの句があったということですね。

黒森をなにといふともけさの雪

芭蕉は想像の中でのみちのくというのを貞門俳諧で、非常に若い時に作っていた。それがまたおくのほそ道の旅を導くことになる。若い時に想像で思っていた風景と実際の風景、その差が『おくのほそ道』の深さを生んでいるのではないでしょうか。

それから『野ざらし紀行』の中では瞬間の発見をしている。瞬間の発見も大事なことだと思います。先ほど二つ発明を言いましたけども、三番目の発明が瞬間の発見でしょう。

古池や蛙飛び込む水の音

この句において、瞬間を発見した。

道のべの木槿は馬にくはれけり

この句も瞬間の発見の句になります。

芭蕉はおくのほそ道の後、軽みに向かっていた感じです。おくのほそ道の経験を経て、古典と向

き合うことを捨てて、それよりも、今まさに生きていることの方が古典よりも重いとした。

古典主義者が古典を捨てて、今と向き合うわけです。そうすると、従来の芭蕉の弟子たちはついて来られないですよね。芭蕉は半分の弟子たちがついて来られないとしても、それをやった。すごいと思います。

それから、芭蕉の死です。芭蕉の死は私にとってもつらくて、連載を続けているときから死に近いころの芭蕉の句を書くことが苦しくて苦しくてしょうがない。で、原稿が遅れます。芭蕉の死を言い訳にしていたわけじゃないんですけど。

その死への道筋がくっきりと見えてくる所もありました。最も愛していた杜国が死んでしまって、その代わりが出てくる。洒堂です。ところがこの男が、大阪に出て、之道という弟子と争っている。その争いをやめさせることの方を、芭蕉は自分の命よりも優先させるんですね。芭蕉の、死へ突きすすむ過程もくっきりと見えてきました。

この三年間に本に纏めるということは非常に苦労でしたけども、今となっては本当にやらせていただいて良かった、と思っている次第です。

平泉への思い、『芭蕉の風景』への思いをじっくり語らせていただきました。

コロナが収束することを祈り、ウクライナの戦が一日も早く収まりますことを祈り、そして皆様が平泉で秀作を残されますことを期待しつつ話を終わりたいと思います。

本当に、ありがとうございました（拍手）。

プロフィール
おざわ みのる
昭和31年　長野市生。
句集『砧』、『立像』、『瞬間』、『瓦礫抄』など
著書『俳句のはじまる場所』
『名句の所似』、『芭蕉の風景』
「澤」主宰、読売・東京新聞の俳壇選者
・中尊寺落慶供養願文はちす咲く
・首桶に込めたる種やはちす咲く
・東稲山葉桜どきを風つよく

戸津説法聴聞の思い出

破石晋照

戸津説法は、毎年八月に琵琶湖西岸の戸津の浜、東南寺というお寺で行われる説法会です。この東南寺は延暦年間に伝教大師最澄様が建てられたお寺で、比叡山鎮守山王日吉権現様への報恩感謝と、ご両親の追善菩提のため、そして民衆の教化のために大師自ら法華経の説法をされたのが、この説法会の始まりです。やがて弟子たちは大師への報恩のためにこの説法会を引き継ぎ、往時は三十日間、明治以降では八月二十一日から二十五日に至る五日間の日程で毎年説法会が行われています。また、この法会の説法師は、宗祖大師の御命日である六月四日に、比叡山浄土院にて修される長講会において天台座主猊下により直接指名され、大師に代わり説法を講じるこの大役を勤めることは、天台座主への登竜門と言われております。

私が初めて戸津説法についてのお話をうかがったのは、山田前貫首が長講会に御参勤される際に、その随行として登叡をさせていただいた道すがらのことでした。前貫首が天台宗の伝統行事などについてお話になられる時はいつでも誇らしげに、そして丁寧にお話になられます。私は随行として出かけるたびに側でお話を伺うことが好きで、いつか戸津説法の説法師として御登壇になられる際には、是非とも駆けつけて聴聞したいと思っておりました。ですから、前貫首が説法師に指名されたことを知った時には『ついに念願の戸津説法を聴聞できる』と心から嬉しく思いました。こうして令和四年の夏、初日より二日間ではありますが、戸津説法聴聞が叶ったのです。

戸津説法初日の朝、比叡山坂本の滋賀院にご到着された前貫首はいつもと変わらぬ穏やかな様子で声をかけてくださいました。滋賀院で朝のお参りを済ませ、東南寺へ向かいます。説法初日は清々しい青空が広がり、真夏の太陽が琵琶湖湖畔を照らします。会場には、大樹孝啓天台座主猊下をはじめ、各御門跡や招待された聴聞者およそ一五〇名が既にお着きになられていました。

この説法会では、多くの聴聞者は屋外にしつらえられた

戸津説法初日の朝　滋賀院にて　　（令和４年８月21日）

席に座って静かに説法を聴くのですが、そこには、近隣にお住いと思われる方々も法話を聞きにいらしており、宗祖大師から伝わる伝統行事の荘厳な雰囲気と共に、どこか鄙(ひな)びた空気も漂います。八月の滋賀県ですから相当な暑さを覚悟していましたが、時折吹いてくる琵琶湖の浜風が涼しくて、いつまでもそこに座って説法を聞いていたいという気持ちにさせてくれます。かつて大師がこの地で法華経を説法された時にも同じ風が、やはり聴聞者を優しく涼ませてくれていたのでしょう。

五日間にわたる法華経の説法会。初日は無量義経についてのお話でした。「お釈迦様は思い通りにならない世界をどのように生きるべきかを悟るために修行をはじめられ、その教えがまとめられた法華経を天台・伝教両大師様が布教されたおかげで、我々はその尊い教えを学ぶことができる」ということに触れられ「無量義経においては、その無量とはなにかについて理解することが大切。私たちは地球という星の上に住み、感染症・戦争・自然災害による被災など、幾多の困難がある中で、多くの人々と生活を共有している。八十億人もの人間がいれば、一つの物事に対する

考えかたも無量の数だけあるに違いない。予期のできないわからないことの多い世界の中で、仏様や自然の御縁により生きている。そのことに気づき理解することが真理に近づくための第一歩になる」とお説きになられました。これは『多様化社会』と言われる現代を生きる者にとって必要不可欠な価値観であり、法華経の普遍性を改めて感じさせられたと共に、前貫首がかつて中尊寺本堂で度々法話されていた中尊寺建立供養願文の『普皆平等』のお話と通ずるもので、感慨もより一層深まりました。法話の終盤では、かつての中尊寺貫首今東光師とのエピソードも語られ、和やかな雰囲気の中で初日を終えられました。

二日目の法話では主に方便品についてお話になられました。「法華経の最重要部分は、すべての人々が仏になることができるという〝一仏乗〟の思想である」と解説され、「この世は本来浄仏国土で、我々は常に仏の見えるところにいるはずなのに、何かに妨げられ見えなくなっている。ゆっくりでいい、仏様を信じて努力をすることによって、世界の平和と幸福という人類の悲願を成し遂げることができる」と結ばれました。

二日間ではありましたが、宗祖大師から続く天台宗の古式戸津説法を聴聞させていただき、あらためて仏教の歴史のスケールの大きさに触れることができました。また、前貫首は常々「我々は他でもない天台宗の僧侶であり、天台座主猊下からのお言葉は最澄様からのお言葉と同じこと。精一杯努めなければいけない」とおっしゃられておりました。天台座主猊下よりご指名をうけた前貫首がこの度の説法会に登壇になられたその御姿から、私は天台の僧侶としての在り方を学ばせていただきました。

（金剛院副住職）

「面　影」に会う

佐々木　邦　世

昨秋、辺りの紅葉が始まりかけたころ、久しぶりに日光を訪ねた。十何年ぶりであろう。それ以前からの御縁があった。学生時代に輪王寺での実践仏教の受習や、先輩風を吹かせて後輩の坊を訪ねたりしたことを、窓外の景を眺めながら思い出していた。

三佛堂の修理はどれほど済んだだろうか、そして旧知の小暮前御門主にもお会いしていろいろ話を聴かせてもらおう。また、同伴の家内は輪王寺一山支院の寺庭婦人に会えるのを楽しみにしているようだ。

いずれ明日のこととして、この日は真っ直ぐ中禅寺湖に向かい、立木観音に詣うでた。

堂を出てから、湖畔の路をぶらぶら歩いて、大分風化した石仏が目にとまると近づいて掌を合わせたりしながら、男体山を仰ぎつつ予約していたホテルに向かった。

宿に入って二階の部屋から見ると湖面が広がる。かつて、史学のゼミの打ち上げの日、だれかとボートに乗って、漕ぐ真似をして半時を過ごしたこともあった。五十年も昔、記憶の中の一齣（こま）である。

翌朝、目が覚めると外はまだ明けていない。歳のせいで近頃こうなのである。時間の経つのをまって、一階に降り温泉浴場に行った。むろん、まだだれも居ない。湧き出た湯が私を待っていた。

浴槽に浸（つ）かって五体を弛（ゆる）め暫くしたときである。音もなく人が入って来て、黙って蛇口の前に静座している。こちらに気づいていない、いや、無視しているようにに見える。下帯ひとつ、背筋の通った男の後ろ姿である。しばらく黙祷してから、なにか呪文を唱えては頭から水を被る。また、黙祷し唱えては水を被る。繰り返して十五分もしてから、すっと出て行かれた。

朝食を済ませてホテルを発つとき、カウンターの前に立って表情も明るく挨拶し、外の通りに誘導してくれているホテルのマスターを見て、気がついた。

今し方、浴場で勤行し水を被っていた当人である。私は、日光いろは坂を下るバスに揺られながら浴場の景を思い返していた。

これ、いつか何かで読んだことがある。

帰宅してすぐ、その一冊を探し出して読み直した。

そう、フランス人ジョルジュ・ブスケが日本に滞在中、明治八年にこの中禅寺湖を訪れたとき、巡礼の人々に出会い、そのときのことをこう書いていた。

彼らは到着するや「湖の氷のように冷たい水」に浸かり、手を合わせて祈りを唱えた。「これは私が日本で見た本当に感動的な唯一の礼拝行為である」と。

渡辺京二の『逝きし世の面影』のなかの「信仰と祭」の一節である。

この一冊には、近代に欧米から訪日した人たちの目に映った事象、著述を引いて思索を巡らしている。

エドウィン・アーノルドは、日本人の信仰のありかたを、「宗教と楽しみは日本では手をたずさえている」と。これを、非難ではなくむしろ賛嘆に近い、と見て、生活のよろこびと溶けあった、（日本や中国の古美術収集家）ギメ風にいえば心安く親しみのある宗教だったと言ってよかろう。

とか、また、

天にまします唯一神に祈れば迷信ではなく、路傍の石仏に願をかければ迷信だという区別が、いったいどうして可能なのかという疑問はともかくとしても…大いなる神秘の世界と交感した

と事実、姿として受けとめている。

日本人の気質と信仰、俗信や娯楽、現世利益の祈り、「南無、南無……」と唱える声、寺詣りは「後生の一大事」（蓮如）のためであるのみならず等々、われわれが問わず語らずに過ごしている宗教意識について、膨大な読書量をもとに問い直している。

あらためて『逝きし世の面影』に会ったばかり、本書一冊五九〇ページをまだ読み了えないうちに、思想史家　渡辺京二の訃報に接してしまった。

（中尊寺仏教文化研究所長）

「復興　信じています」

ドナルド・キーン先生　卓話

わたくしは、最初にここ中尊寺に参りましたのは、今から五十六年前（昭和三十年）です。芭蕉の『奥の細道』をたどって訪ねました。そして金色堂に入って、震えるほど感動して、これこそ極楽浄土だと思いました。あれ以来、現在まで日本を考えない日はありません。

今回、東北は大変な震災に遭いました。でも、終戦直後の、あの廃墟となった東京が見事に復興しました。東北も同じように、必ず復興する、そう信じています。

作家・高見順が、太平洋戦争の末期、あの上野駅で、疎開する人びとがだれも先を争ったりしない、我慢強く堪えていたのを見て、「こうした人々と共に生き、共に死にたい」と書いています。わたくしも、そう、こうした日本人と共に生き、共に死にたいと思います。

〔九月十一日　東日本大震災物故者慰霊法要の後で〕

寺報『関山』十七号（平成二十三年十一月十一日発行）より再録。

平泉の外の「平泉の文化遺産」

及川真紀

はじめに

平泉の文化遺産が世界遺産に登録されてから十一年となりました。現在、世界遺産に登録されている資産は、中尊寺、毛越寺をはじめとする寺院や庭園、経塚など浄土空間の造形を表すものですが、当初、世界遺産登録は、奥州藤原氏の創り出した平泉としての登録を目指して、平成十八年に最初の推薦がなされました。しかしこの推薦は、世界遺産委員会において記載延期の決議を受けたことから、推薦資産を浄土の造形を表す資産に絞り推薦することとし、奥州藤原氏の政治的拠点や荘園など、浄土の造形を直接的に表すものではない資産については、本登録がなされた後に拡張登録により登録を目指すとして、調査と研究を進めることとなりました。以後、十四年間にわたるこれらの遺跡の調査により、これまでの平泉中心部を対象とした調査研究からは想像できなかった平泉の新たな事実が解明されてきています。

ここでは、平泉の外の「平泉の文化遺産」として、奥州市に所在する白鳥舘遺跡と長者ケ原廃寺跡、接待館遺跡をご紹介します。いずれも「柳之御所・平泉遺跡群」として国史跡に指定されている遺跡です。なかでも白鳥舘遺跡と長者ケ原廃寺跡は、拡張登録を目指して重ねてきた調査研究により、平泉の成立と繁栄に深く関わった遺跡であることが明らかになっています。

白鳥舘遺跡

白鳥舘遺跡は、中尊寺から北東に三・七キロメートル、奥州市と平泉町との境界に位置します。遺跡は、北上川の西岸に半島状に突き出た丘陵とその裾野の低地にかけて広がります。この付近は、北上川両岸の丘陵が迫る狭隘部で、平泉地域の北

辺を画す場所にあたります。遺跡対岸の平泉町長島には、十二世紀の伝教大師の石像や平泉型宝塔、十三世紀の板碑が所在する月館大師堂（月館Ⅲ遺跡）が位置します。

白鳥舘遺跡は、平安時代の九～十世紀ごろに集落が営まれたのち、十二世紀から室町時代の十五世紀半ばにかけて連綿と利用されたことが発掘調査によって明らかになっています。遺跡の画期は、奥州藤原氏が繁栄を極めた十二世紀で、丘陵の裾野の低地部の発掘調査によって掘立柱建物群や井戸跡のほか、かわらけ窯跡や鍛冶炉跡からなる十二世紀の遺構群の存在が明らかとなり、平泉の時代に、ここで手工業生産が行われていたことが判明しました。遺跡からは、中国産陶磁器や国産陶器、かわらけなど平泉中心部の出土品と同じ様相の遺物に加え、銅塊や銅製提子の金具、水晶製数珠玉の未製品など手工業生産に関係する特殊な遺物が出土しました。特に水晶製数珠玉未製品は、母珠の横孔を研磨している途中で割れたものであることが電子顕微鏡での観察により判明しまし

北からみた白鳥舘遺跡と衣川・平泉

た。中尊寺金色堂の秀衡棺に副葬されていた水晶製数珠玉母珠は孔が透明になるまで磨かれていますが、白鳥舘遺跡出土の数珠玉も同様の技術で製作されたことが窺えます。

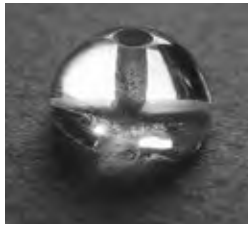
なぜここで手工業生産が営まれたのかについては、遺跡の環境から読み解くことができます。低地の遺構群は、現在では北上川が氾濫（はんらん）すると浸水する場所ですが、これは北上川が遺跡の西で大きく蛇行して流れていることが一因です。この付近の北上川流路が描かれた最も古い資料である元禄十二年（一六九九）の「下胆沢郡大絵図」には、白鳥舘遺跡に向かって真っすぐ南流し、遺跡の北端で白鳥川と合流する現在とは異なる流路が描かれています。絵図の流路は近世の郡境と一致しており、絵図が当時の流路を正確に描いていることは裏付けられます。また中世には洪水堆積層が見られないという発掘調査の所見からも、中世の北上川河道は絵図の流路と大きく変動していないと考えられ、中世には遺跡の北端で北上川と白鳥川が合流していたと考えられます。加えて遺跡の南には、北上川の落堀（おっぽり）とされる沼が所在します。これらはともに川船の停泊には最適な場所であり、白鳥舘遺跡は北と南に船着場を擁していた場所だったと推定されます。さらに遺跡東部の北上川の河床は岩礁地帯であるため、北と南に船留めをもつ白鳥舘遺跡は、岩礁を避けて船越をすることも可能な地点でもありました。白鳥舘遺跡は、こうした地形的特徴から、生産と流通を兼ね備えた川湊（かわみなと）として平泉の経済を支えた遺跡であったと考えられます。

白鳥舘遺跡の川湊は、奥州藤原氏の滅亡後、鎌倉時代以降もその機能を失うことなく利用され、十四世紀後半には丘陵部へと拠点を移し、中世城館が築かれます。十五世紀後半には城館が廃絶し、同時に川湊としての機能も失ったとみられます。鎌倉時代になっても継続して使われている点からも、重要なインフラ施設であったことが窺えます。

平泉中心部での手工業生産については、梵鐘（ぼんしょう）鋳造遺構（白山社遺跡）や瓦窯（がよう）跡（鈴沢瓦窯）といった寺院建設に伴う生産のほか、陶器窯（とうきよう）跡（花

立窯）、かわらけ窯跡（泉屋遺跡）、志羅山遺跡を中心とした銅細工や漆工関係の生産、館に付随すると捉えられる金属や織物、漆工などの小規模な手工業生産（柳之御所遺跡）があることが知られていますが、これらのうち陶器やかわらけ、銅製品などの生産地点は、十二世紀前期には中尊寺の南にあり、十二世紀中期には毛越寺の東と段階的に南へ移動しています。しかし毛越寺前の東西道路が整備され屋敷地となる頃には、これらの手工業生産遺跡は平泉中心域から姿を消します。その一方で、十二世紀後期には、すでに流通の拠点であった白鳥舘遺跡に生産の機能が加わり、流通と生産を兼ね備えた拠点となります。このことから平泉においては、十二世紀後期に都市域が拡大し、これに伴い手工業生産地が郊外へ移動したことが指摘できます。したがって白鳥舘遺跡は、平泉の周辺において都市平泉の経済を支えた遺跡であるばかりでなく、平泉の都市化の実態をも示す遺跡ということができます。

なお、現在の遺跡名は所在地の字名に拠るものですが、これは十四世紀末に城館が成立してからの名称と考えられ、これ以前には違った名が存在したと思われます。白鳥舘遺跡の南には「衣関（きぬとめ）」という字名がありますが、「とめ」は舟留めの場所を表す言葉として用いられている例（慶長五年「葛西大崎舟とめの日記」）があることから、白鳥舘遺跡は、「きぬとめ」という名の川湊だったのではないかと推測をしています。中尊寺の所在地は字衣関ですが、白鳥舘遺跡の川湊も同じ名を持っていたとすれば、中尊寺と何らかの関係があったのかもしれません。



白鳥舘遺跡出土
水晶製数珠玉未製品

長者ケ原廃寺跡

長者ケ原廃寺跡は、中尊寺の北一キロメートル、衣川北岸の段丘上に所在します。地元では源義経を平泉へ連れてきた商人「金売吉次」の屋敷跡と長い間伝えられてきた遺跡でしたが、昭和二十四

年からの考古学的な調査により、築地塀と本堂、塔と推定される建物、南門を備えた古代末期の寺院跡であることが明らかになっています。

遺跡は、東西百十メートル、南北九十メートルの規模で方形に築地塀跡が巡り、築地塀跡の外側には溝跡が伴っています。築地塀跡南辺のほぼ中央には南門跡があり、塀跡の内部には本堂跡と西建物跡が中央やや後方に並置されています。

本堂跡は桁行、梁行とも五間（十六・八メートル四方）の礎石建物であり、南孫庇付き三間四面堂跡あるいは双堂形式の方五間仏堂と推定されています。西建物跡は、三間×三間（七・六五メートル四方）の礎石建物で、多宝塔跡または方三間堂跡の可能性が指摘されています。南門跡は梁行三間、桁行二間（七・二×四・五メートル）の礎石建物です。真ん中の柱間が左右の柱間より広く、中柱を持たない形式の建物です。また、築地塀跡北辺と西辺の中央には、それぞれに掘立柱建物の門跡が伴うことも確認されています。門跡は棟門と考えられます。北門跡、西門跡のみが掘建柱式と建築構造が異なりますが、ともに門の外側の溝跡が土橋となっていることから、寺院の創建当初から設置されていたとみられます。

これらの建物の配置は、本堂跡と西建物跡及び北門跡、西建物跡と西門跡のそれぞれの間隔が本堂跡の間尺の六間分にあたる二十一メートル、本堂跡と南門跡が十四間分、四十九メートルの位置に配置されています。また、南門跡と本堂跡、北門跡の柱間寸法と中軸線は一致しており、中軸線の延長は関山丘陵の最頂部に向かっています。さらに西建物跡の南辺は本堂跡の南辺から二列目の礎石列と一致するなど、極めて緻密な設計に基づいて造立されたことがわかります。

このように本格的な寺院であるにも関わらず、遺跡の周辺には関連施設がみられず、孤立的に存在する寺院である点も非常に特徴的です。

長者ケ原廃寺跡は、出土遺物から十世紀末から十一世紀代の寺院と考えられます。廃絶した時期について直接的な証拠はありませんが、遺構には改修の痕跡がほとんど見られないことなどから、

その存続期間は短く、遅くとも十二世紀初頭までには寺院としての機能を終えることとなったと推定されます。

奥州藤原氏成立の前段階である十～十一世紀、長者ケ原廃寺跡が所在する衣川地域は、奥六郡の南端にあたり、中尊寺が所在する関山には「衣関」という関が設置されていたと考えられています。実際、中尊寺境内の発掘調査でも、広範囲を囲繞する十世紀の大溝跡が発見されています。

長者ケ原廃寺跡は、「衣関」と同時期に存在した寺院であり、寺院の中軸線が関山山頂に向かって設定されていることから、「衣関」に関わって設置された寺院の可能性が非常に高いといえます。

奥州藤原氏誕生の契機ともなった前九年合戦において「衣川関」（衣関とは別施設という説もあります）は、奥六郡との境界地として激戦が繰り広げられた場所でした。したがって当時のこの地域の人々にとっての関山は戦場の跡として認知されていたと考えることもできます。藤原清衡公は、

北からみた長者ケ原廃寺跡と関山

このような南北境界の地であり戦乱の時代の象徴でもあった「衣関（衣川関）」の跡地に、浄土・平泉の基点として中尊寺を建立します。長者ケ原廃寺跡は「衣関」であった関山を望むよう配置されており、関山が十二世紀に奥州藤原氏の仏教的理想空間の中心の聖なる山となった背景を示す遺跡といえます。

接待館遺跡

接待館遺跡は、中尊寺の北、衣川の対岸に所在します。安永六年（一七七七）下衣川村風土記書上には「セッタヤ館」として秀衡母の居館と記されますが、のちに謡曲「接待」の影響を受けて「接待館」という名になったと推定されています。

遺跡は、衣川に向かって弧を描くように延びる堀跡と土塁によって東西百二十メートル、南北六十五メートルの範囲が楕円形状に区画され、さらに区画内部の中央は、平面コの字状の溝跡により東西四十メートル、南北二十メートルが区画されています。堀跡と溝跡からは多数の十二世紀後半のかわらけが出土していますが、特に中央部のコの字状の溝跡からは、完形のかわらけが多量に廃棄された状態で出土しています。堀跡と土塁の内部には、コの字状の溝跡以外の遺構が全くみられず、堀跡の東側で十二世紀の四面庇の掘立柱建物跡が一棟確認されています。

柳之御所遺跡と同様に、大規模な堀跡で不整形に区画する十二世紀の遺跡であることから、発掘された当時は、藤原基成の館であり、源義経が自刃した「衣河館」の跡ではないかと話題になりましたが、区画内部に建物跡や井戸跡など、館として必須の遺構が存在しないことから「館（たち）」の可能性は低いと考えられます。

館以外で堀と土塁で区画される遺跡という点では、平泉町の白山社遺跡に類似点が見いだせます。白山社遺跡は幅十メートル以上の堀跡と土塁によって南側が開いたコの字状に区画され、南には苑池を持つ十二世紀の遺跡であり、『吾妻鏡』文治五年（一一八九）九月十七日の条所載の「鎮守社　中央惣社」跡と想定されています。白山社遺跡が「中央惣社」であるとすれば、同様に堀や土塁を有する接待館遺跡についても鎮守社などの神社跡の可能性がでてきます。さらに鎮守社跡であれば、北方鎮守の「今熊野（いまくまの）社」に該当する可能性が高いと考えられます。

接待館遺跡の西約四百メートルの大石ケ沢には、かつて熊野神社が鎮座しており（昭和二十二・二十三年の洪水のため現在は字池田に移転）、明治二十九年の棟札には、藤原基衡が紀伊熊野神社を勧請したもので、秀衡も尊崇したと記されています。下衣川村風土記御用書上の記載からは、少なくとも江戸時代から大石ケ沢に鎮座していたこと、中尊寺周明院が別当であったことが知られます。また社地は「南北二十二間、東西十四間」とかなり大規模な社であったことが窺（うかが）えます。

接待館遺跡（写真上が北）

このように遺跡の性格は、今のところ類推に留まりますが、完形のかわらけが大量に廃棄されていることから、十二世紀後半には、衣川の北側でも規模の大きな儀礼や宴会が行われていたことは確実で、「平泉」の範囲を考えるうえで非常に重要な遺跡であるといえます。

おわりに

以上、平泉の外の「平泉の文化遺産」として奥州市所在の三つの遺跡をご紹介してきましたが、いずれの遺跡も平泉中心部の調査研究だけでは見えてこなかった「平泉」の新たな姿を垣間見せてくれます。こうした平泉周辺の遺跡調査のさらなる進展が、奥州藤原氏が創出した理想世界「平泉」の実相を解明する鍵になると考えています。

おいかわ　まき
奥州市教育委員会世界遺産登録推進室

父を思う

菅原　年

先日、行年九十歳で父、菅原正志が他界した。

父は、昭和八年生まれなので、十二歳で終戦を迎えたことになる。十二歳といえば、世の中の情勢もほぼ理解できていただろう。生前、私に戦時中の話をすることはほとんど無かったが、おそらく当時の農家の生活は苦しく、ひもじく、生死にかかわる辛い思いをしたのだろうと想像はつく。それでも、晩酌が進み、上機嫌になると懐かしそうに昔話をすることがあった。子供の頃、父に与えられた家事は、ランプをきれいに掃除することだったそうで、煤で黒くなったランプを手際よく分解して、磨き上げる重要な役割だったということと、もう一つ得意そうに話していたのは、高校生の時には水泳の選手で、かなり良い線まで行ったという自慢話だった。この二つの話は、取り立てて派手な逸話ではないのだけれど、なぜか私の記憶に沁み込んでいる。電気のない貧しい暮らしだったとか、水泳選手になりたいという夢が絶たれた、そんな話ではなかった気がする。

父は、いわゆる『昭和の頑固おやじ』ではなかった。私が中学で野球に打ち込んでいた時には、指導めいた言動や、過度な期待や応援も無かった。高校の時、タバコで停学処分を受け、校長室で父が頭を下げた時も小言は無かったし、美術大学に行きたいと突飛なことを言い出し、そのために東京で浪人生活をすることになるのだが、それでも何も聞かずに援助してくれた。大学の研究室に籍を置き、彫刻家として芽が出そうだった時も、ものに成らず平泉に戻り無職になった時も、父は何故か静かに私を受け入れてくれた。どうして父はそんな風に寛容だったのだろう。今さらだが、父の想いを想像してみた。

戦中・戦後に青春期を過ごした父には、自由に

夢を語り、あての無い希望に挑戦できる状況など無かっただろう。まして裕福でない農家の家督だった父は、年老いた両親と、小さな土地と稼業を守らなければならなかった。そんな制約された不自由な境遇だったからこそ、せめて息子達には、自分と同じ思いをさせまいとしていたのではないか。息子達に不自由な思いをさせないようにと、冬は出稼ぎをしながら薄利の農業を続けて来た。私が野球をすることや、不良になりタバコを吸うこと、彫刻家になることも、夢半ばで出戻ることも、父にはさほど気にすることではなかったのだ。息子達が自由にやりたい事ができているか、生き方を選択できているかが重要で、結果の良し悪しは二の次だったのだろう。父と母は私達兄弟に、自由に考え、選択できる環境を与え続けてくれた。そして、そのことを感じさせないように育ててくれた。

と、父の死を受けて、かなり感傷的に回想しながら作文していたが、まるで違った考えが頭に浮かんでいる。

毎年春になると、中尊寺坂下の岩渕勝次郎(※)夫妻をはじめ、友人達と、父の兄、菅原信夫夫妻が我が家に集まり種蒔きをする。種蒔きの最中、身振り手振りのバカ話で時折作業の手が止まる、まるで安いコントを見ているようだ。何とか一通り作業を終えると、にわかに慰労会（呑み会）が始まる、それが実に愉快だった。老々の人達が、毎年毎年、同じ昔話を繰り返しては、声を立てて笑いこけ楽しそうだった。慰労会をする為の種蒔きにさえ感じるくらいだ。そして、その慰労会には、中尊寺の佐々木邦世さんが、毎年お祝いを持って来てくださり、農業と農家へのねぎらいの講話をしてくれた。それが、父はとても嬉しそうで、なにより誇らしげだった。父は農業が本当に好きで、友達と酒を呑みながら笑うことが好きで、この生活を選択したのではないだろうか。戦争で青春を奪われ、選択肢のない人生を、ただ息子達の為だけに生きて来たのではない。そんな気がしてきた。もしそうであるならば、私の心は、ほんの少し楽になる。

※勝次郎氏は、農業の傍ら喜多流謡の稽古を積み、中尊寺神事能の地謡を六十年も務めた方でした。

すがわら　ねん
昭和41年　平泉町瀬原生まれ
多摩美術大学彫刻科卒業
行動美術協会展　行動賞・建畠覚造賞受賞
彫刻設置　一関市北上川遊水地公園
長野県富士見高原創造の森
平泉小学校中庭／奥州市姉体センターほか
東京渋谷　ラ・フォーマル展毎年出品

残りの火

関山植物誌〈13〉

破石晋照
（金剛院副住職）

切り株

参道から少し離れて山の中を行くと、たくさんの切り株がある。大きな杉の切り株や、広葉樹の切り株。つい最近間伐された切り株もあれば、大昔に倒されたような切り株もある。学校の帰り道に座って本を読んでいた懐かしい切り株が、三十年経った今でも当時と変わらずそこにあり、触れてみると、朽木とは思えずに、生命を感じられることもある。私はその〝なぜか朽ちない切り株〟を不思議に思っていた。

あるとき、気になるタイトルの本がおすすめされて、カートに入れた。ドイツの森林管理官が書いたその本には、それまで私が抱いていた〝朽ちない切り株の不思議〟について書かれていた。

切り株は葉緑素を持たず光合成ができないため、常識的に考えれば生存などできるはずがない。しかし、密生した樹木は相互にコミュニケーションを取り助け合い、支え合うことができる。樹木は見えない地中で根と根を直接つなげたり、他の生物を媒介することにより、互いに栄養の交換が可能で、万が一弱ってしまったときには周りの樹木からサポートを受けて回復することができる。そして、仲間意識の強い種類の樹木は、連携・成長し、彼らにとって好ましい生態系を何百年もかけて作ってゆくが、何かしらの理由で密生することが妨げられ、隣と連携することができなくなった樹木が増えた森は、生態系を維持することができずに、衰えゆく運命となる。

私の〝朽ちない切り株〟も、見えない地中で他の樹木の助けを受け、今日も切り株として存在し続けているのかもしれない。物を言わない植物たちも、密生することにより、根をつなぎ助け合っている。手をつなげるほど密な距離にいるからこそできる仲間との支え合いを、そろそろ私も取り戻したいなと思う。

切り株

紅葉銀河
――ちはやぶる神代も聞かず――

神無月が霜月にかわる頃、わずかな照明が足下を照らす夕暮れの月見坂を登り、本堂まで来るとまるで銀河のような紅葉が頭上を覆う。足をすすめると金色堂の広場のあたり、弁天池のほとりの小さな小屋から、香ばしい珈琲の薫りが漂ってくる。

小さな小屋

紅葉銀河が始まったのは平成二十九年。初めはネット通販で購入した投光器で木々を照らすだけの粗末なものだった。平成三十年には、機材も変更し専門家の指導の下、決して煌(きら)びやかではないけれど、みちのくの古刹らしいライトアップになったと自負している。とはいえ、静寂すぎる空間には何かホッとできるものが必要だと感じていた。

当時、紅葉銀河を担当していた総務次長の清水秀法が、参拝のお客様に温かいものを提供したいと、協力して頂ける店舗を探し始めたが、なかなか良いお返事がいただけずにいた。平泉町外へも声をかけてみると、ご縁があって奥州市の「cafe温(ぬく)」さんをご紹介いただいた。

紅葉銀河まっただ中のある日、仕事の邪魔を承知でご主人の小岩さんにお話を聞いた。

総務　早いもので、小岩さんに来て頂くようになってもう四回目の秋ですね。

小岩　お陰様で、毎年楽しみにして下さるお客様もいたり、店のお客さんからも「今年も中尊寺でお店だすんでしょ。頑張って」などと言われるようになりました。

――初めは緊張されているように感じました。当時の思い出などありますか？

小岩　私がワインなどを仕入れているお店の店主さんと清水さんが懇意にされていて、それで突然そんな話になったのです。当時から介護施設などを中心に有償ボランティア活動（お安い価格で珈琲のある時間を楽しんでもらう）や、イベントや他店舗との共同での移動販売はやっていたので、ノウハウが無いわけではなかったのですが、水沢市内から通うこととか、お店を数週間休むことなど心配はありました。それでも金色堂の目の前でお店を出させて頂けるというのは貴重な機会ですし、そこでの珈琲の香りやお客様とのやりとり、そんな想像をしたら、珈琲屋冥利につきる。そんな思いで出店を決めました。

――私も清水から「知り合いに紹介された喫茶店が、出店してもいいと言っているのですが……」と推薦されたのですが、詳しく聞いてみても歯切れが悪く、その喫茶店には行ったことも無いというので、本当は躊躇(ちゅうちょ)しました。

小岩　ホントにね（笑）清水さんは、「お礼に行きます。ポスター持っていきます」とは言ってくれるけど、未だにお店には来てくれていませんから。

――すみません。今度連れて行きます。

小岩　中尊寺に知り合いがいるわけでもないし、他に出店があるわけでもないしホントに不安だったんですけど、やると決めたら早いんです。この小屋だって、日曜大工が得意な知人に頼んだら喜んで作ってくれたんです。実は年々進化してて、風よけが出来て天井が出来て、ついにスノコの床も出来ました。そのうち住民票を金色堂前広場にしようと思います（笑）昨年は、季節外れの豪雨の日があって。中尊寺の職員の皆さんにも「今日、店あけるんですか？」なんて心配されながらもビショ濡れになって開店しました。和尚さんにも負けない修行してますよ。ここに来てみて、愛想の悪い私にも、みなさん優しくして下さって本当に助かりました。和尚様なんて恐れ多い方々なのかと思っていましたが、とても人間味を感じる事が多かったです。

―― ネルドリップの風味は他には代えがたいけど、ネル（布）の管理も手間がかかるでしょうね。最初の年、忙しい時間に来てしまって沢山の方が待っていたので、珈琲豆「紅葉銀河」を買わせてもらったんだけど、「直ぐ淹れますから珈琲飲んでいって下さい！」って強く言われましたよ（笑）

小岩　ホントですよ。豆だけ買うなんて。珈琲屋としては飲んでもらってナンボですから。「紅葉銀河」ブレンドも、基本的には初年度から変えてなくて、私自身が様々な産地の豆とブレンドを試して、美味しいと思った物をお出ししています。店舗だったらお客さんの好みを聞きながら、苦みを効かせたり、酸味を抑えたり調整するんですけど、ここでは出来ないので、幅広い方にとって飲みやすい苦みと適度な酸味にしました。いつかは自家焙煎にも挑戦したいのですが、まだまだ修行中です。今年からはじめた甘味の「温々」で働いてる子は私から見れば抽出もまだまだなんですが、いきなり焙煎から初めて。聞けば「豆を売った方が儲かる」と。現代っ子ですよね。

―― 良くも悪くも、ですね。四年目になって、僧侶も職員も、もうすぐ温さんが来るなあという温かい気持ちで待っています。

小岩　この時期が近づくと準備が意外と大変で、友人や常連さん、アルバイトの子達を総動員しないと間に合わないんです。

―― カップにシールを貼ったり？

小岩　こっそり見てたでしょ（笑）？　陶器では提供できないので紙コップを使うんですが、手が熱くならない物を選んで、印刷に出すなんて経費はかけられませんから、パソコンでシールを作って貼って。それでも待っている方々のことを想うと頑張れます。

―― 日々の珈琲の準備も大変でしょ？

小岩　ネルドリップで出そうと、そこはこだわりました。お待たせしないように作り置きや、ペーパードリップも試しましたが　やっぱりネルドリップでいこうと。お客様ひとりひとりに淹れて差し上げたいという、私の意地というか、わがままというか。

ネルドリップ中

―― 今年の担当の亮王と、前任だった秀法が無理をお願いして、店舗を増やしていただきました。

小岩　店舗でも甘酒ミルク　お汁粉はメニューにあるのですが、このテントだけで珈琲と両立は無理ですから。また周囲を巻き込んで二店目に挑戦してみました。でもやるからには味にもこだわりたくて、ちゃんと仕込みも手は抜いていません。

―― コーンスープの小田代さんとはお知り合いだったんですか？

小岩　農家さんがはじめたスープ屋さんで、同じイベントで出店していた関係でお誘いしました。元々彼のお父さんが手広く野菜作りや、食品加工もされているので、材料の栽培からこだわっていて、何より美味しいですよ。三店舗そろうと賑やかですし、助け合いながら営業しています。

―― 先日やっと水沢の店舗にもお邪魔できました。

小岩　ご来店ありがとうございました。もともと自宅で、リフォームを考えた時に、将来的にはお店を営業するという思いで、それこそ退路を絶つつもりでレイアウトを決めたんです。役所の手続きなんかも自分で通って。それでもしばらくは自宅として母の介護と国交省関連の事務所に派遣されるような事務職を続けました。珈琲はそれこそ中学生くらいから好きだったので、自然に「いつかは喫茶店を開きたい」という思いがありました。喫茶店でバイトしたり、珈琲豆の卸売り業者にも勤めてみたり少しずつ勉強して。なによりも、一杯で癒やされるものって、なかなかないと思っていて。

―― 外観がアトリエっぽいと言うか、洒落た個人事務所

のようで、入口から狭い廊下を通り抜けていくのが面白いですよね

小岩　私も図面を見た時は、なんで奥側に廊下なのか？って思いましたけど設計さんのこだわりで。隠れ家的な要素と、キッチンから小さな窓を通して通りが見えるのも良かったです。生前の母にとっても通りが見えていい部屋だったと思います。店舗よりも駐車場を広くとっていたんですが、向かいにスーパーマーケットも来て、向こうからも良く見える場所になって。いつの間にか賑やかになって商売には良い方向になっています。思っていたよりも早く母を看取ることになって、ちょうど仕事にも一区切りがあったので、思い切って開業したんです。不安もありましたが、覚悟を決めて今日まで来ました。

――常連さんの雰囲気も温かく、店内も規格的なチェーン店とは違っていい時間が流れるお店でしたよ。

小岩　ありがとうございます。「Cafe温」を始めて七年なんですが、紅葉銀河への出店は四年目です。半分以上は中尊寺さんにお世話になってます。喫茶店の常連さんからも「今年も行くんでしょ！中尊寺」と公認をもらっています。喫茶店のお客さんもちゃんと中尊寺に来てくれてますし。地元の方でも中尊寺は久しぶりという方も多くて、紅葉の素晴らしさを再確認してもらってます。そこで私が珈琲淹れさせてもらっているというのは鼻が高いです。

――中尊寺の参拝者の方々雰囲気はどうですか？

小岩　コロナでも十月、十一月は何故か、行動規制が無かったのでこの二年間は近隣の方々という感じがしましたが、今年は日本全国、海外の方も多くて、「少しは英語も話せないと駄目ね」とつくづく思いました。忙しくなると、珈琲に集中してしまって、愛嬌が無いもんですから、お客様を呼ぶ声も事務的になってしまって、反省しています。淹れ立ての美味しい珈琲を飲んで頂きたい一念ですからお許しいただきたいと思います。

――来年以降もよろしくお願いします。

小岩　もちろんです。私の珈琲が恋しくなったら「Cafe温」へも！お待ちしてます。

――もちろんです。

奥州市 cafe 温

――からくれなゐに水くくるとは――

晩秋から年末にかけて、京都をはじめ日本各地でライトアップやイルミネーションが盛んになる。それは華々しく煌びやかで、街に隣接しており、見物者の移動や飲食に事欠かない場所が多い。中尊寺は、八百メートルの参道を歩いてようやくたどり着く喧騒（けんそう）とはかけ離れた空間である。そこに一杯の安らぎを添えてくれた、出店者の方々に感謝したい。

紅葉銀河の照明設計は平成二十四年の金色堂照明ＬＥＤ化でもお世話になった松下進氏（松下進建築・照明設計室）にお願いしている。地元の平泉電力工業所千葉敬社長との微妙な調整作業が開幕ギリギリまでおこなわれていることはあまり知られていない。「ライトは何かを照らすものでしょ？虚空を照らすなんてやったことがないですよ。」千葉社長の困惑も理解できる。松下氏が設計した照明計画の狙いも、顕然するまではわかりにくかったかもしれない。はじめた頃の設計者と施工者の意見のぶつけ合いは、さながら禅問答のようであったが、今では阿吽（あうん）の領域にも迫りつつある。工期にも制限のある中、施工にご尽力いただい

た方々には感謝の言葉しか無い。

秋の紅葉は、抜けるような青空を透かして愛でるのが自然な姿であろう。しかし、漆黒の闇を背景に浮かび上がる色彩は、私達が見えていない何かを感じさせてくれる。特に弁天池に映る逆さの風景は、常にそこにあるにもかかわらず見過ごしている事柄があることを私達に教えてくれるようだ。真夏、深緑の葉の中で隠れるように紅や黄は存在していたし、紅葉が散り枯れ枝に見えるその木肌には、既に新たな芽が春の準備をしている。

（インタビュアー総務執事　菅野澄円）

ちはやぶる神代も聞かず竜田川
からくれなゐに水くくるとは

在原業平（ありわらのなりひら）

「ちはやぶる」の一首は『古今和歌集』秋・二九四。百人一首にも収録されています。

在原業平は平安時代初期の官人・歌人。平城天皇の孫。六歌仙・三十六歌仙の一人です。

Cafe温
〒023-0804 岩手県奥州市水沢谷地明円46
OPEN 13:00～20:30（定休日：月曜日）TEL. 0197-23-5531

農事組合法人 上小田代
〒023-0171
岩手県奥州市江刺田原字蒲道沢16
https://kami-kodashiro.com/

松下進建築・照明設計室
〒145-0062 東京都大田区北千束3-24-1-303
http://www.matsushitas-lighting.com/index.html

風信 / 語録

（郵便受けから）

コロナ禍で修学旅行自体がなくなりそうだった中、平泉に行くことができました。中尊寺の歴史にはとても興味がありました。そして、実際に金色堂を見たときの、あの迫力は想像を絶するものでした。中尊寺は、歴史を知るだけでも勉強になる上、実際に行ってみると、さらにたくさんのことがわかりました。このようなすばらしい所に行けて良かったです。本当にありがとうございました。

北上市　小学校六年　R・N

金色堂は、とても金色に輝いていました。木材を青森や秋田から取り寄せ、それを組み立てることは、たいへんだったと思います。そして金色堂には、願いや思いがこめられているんだなと感じました。

秋田県　小学校六年　K・H

金色堂は、建物の中にあって、さらにガラスでかこまれていて、大事に守り続けてきたんだなと思いました。たくさんの仏像があって、細かいところまでつくられていてすごいと思いました。中尊寺の歴史を知ることができました。ありがとうございました。

秋田県　小学校六年　A・H

中尊寺へ行くことを楽しみにしていました。社会の授業では金色堂の動画を見て勉強しました。でも、実際見てみると想像の倍、黄金に輝いていて、すごく迫力がありました。お堂の中に入ると説明のアナウンスのおかげで、授業で調べたこと以外のことも、多く学ぶことができました。その後の座禅体験では、自分の心を空っぽにすることで、自分と向き合うことができる、それが大切だということを学ぶことができました。

宮古市　小学校六年　Y・M

修学旅行で一番印象に残っているのは金色堂です。事前に映像を見て中尊寺について学習しましたが、実際に見た金色堂は外観や内装がとても綺麗でした。また讃衡蔵の展示品が昔から遺っていると知ったときはとても驚きました。今後の授業の発表の際に活かしていきたいと思います。

北海道　中学校三年　K・N

紅葉銀河の催事から

佐々木　五　大

本号巻頭でも紹介していますが、中尊寺は秋に紅葉のライトアップ企画〝紅葉銀河〟を催しています。既に六年目を数えるほどになり、徐々に秋の恒例企画として知られるようになりました。

紅葉銀河の期間中には、一山僧侶による法楽〝聲明の夕べ〟や、演奏・朗読会なども催されます。昨年は特に地元の川西大念佛剣舞保存会による夜間奉納公演が十一月三日にありました。

川西剣舞は鬼形の面を付ける「鬼剣舞」の一つとして、国の重要無形民俗文化財に指定されています。さらに昨年の十一月三十日、ユネスコ無形文化遺産に「風流踊」が新たに登録されました。これを構成する四十一件の資産にはこの鬼剣舞も含まれており、その文化的・歴史的な価値がより広く認められたところです。

風流踊は主に死者供養・請雨・五穀豊穣・除災を目的とするようです。川西剣舞は前九年・後三年の合戦において没した人々の怨霊を慰め、成仏を扶けようとするものですから、まさに鎮魂・供養のための舞です。

当山の年中行事「藤原まつり」においても、藤原四代公追善供養のために毎年奉演（公演）されていますが、今回はじめて日が落ちてから観賞できました。

周囲の照明のいくつかは光源がこちらを向いてしまうため、幽玄というほどの密やかさではありませんが、やはり鬼の表情が陽光の下とは大きく異なります。暗さで鬼面の彩色が不明瞭となるにしたがって、逆にその輪郭が強調されます。少しコミカルにも見えていた表情が、徐々に厳しいものに変貌していきます。

また演者の体勢によっては、顔がほとんど窺えなくなる場面があります。暗闇に塗り込められ、此方から見えない領域が生じてくると、そこに鬼の負の情念が渦巻いているように思えてきます。

地面を踏み締めるステップ――いわゆる「反閇」と呼ばれる足遣い――にも、いっそう（呪術的な）力強さが感じられるようになります。これも観衆である私たちが、足下に眠る霊魂の存在を、夜になってより意識するようになるからでしょう。剣舞が持つプリミティブな魅力が大いに増幅された、良い奉演となりました。

今後の紅葉銀河においても、公演やいままでにない企画を模索することになると思われます。ご注目いただければ幸いです。

すっかり秋の催事として定着した感がある紅葉銀河ですが、企画当初は「紅葉は自然現象であり、自然の美がある。人工の光で照らすことによって、当山独自の風情を損なうことにならないか」という意見がありました。

川西剣舞大念佛剣舞の夜間奉演
押込と呼ばれる一人舞、経蔵前にて。
（令和４年11月３日）

中国には『氷炭相容れず』『氷炭相息う』という別々の格言がありますが、字面からも分かるように、正反対の意味合いを持っています。

木炭の熱は氷を溶かし、氷は水となって燃焼を妨げるから、同じ器に入れておくことができない。したがって「相容れない」ものと考える方が多数派だと思われます。反対に、氷は火力を程よく抑制して火持ちを良くし、炭は氷を（本来の状態である）水に還元してあげている、と捉えるのが「相息う」です。

自然としての紅葉と、人為的演出である照明との関係は、この氷・炭を巡る解釈の相違によく似ています。

紅葉銀河においても、当然ながらテーマパークのごとくふんだんに照明を焚くのではなく、抑制的な照度に留めてはおります。しかし長年中尊寺に参拝されたお客様の中には、なおも違和感をお持ちの方がおられるかもしれません。この「本質的に照明は中尊寺に相応しいのか」という自問は、これからも大切にしていきたいものです。

（円乗院副住職）

陸奥教区一隅を照らす運動
托鉢会に参加して

清水秀法

昨年の十一月二十六日、陸奥教区一隅の托鉢が二年ぶりに宮城県登米市の興福寺を会場に開催されました。今回の托鉢の浄財は、一隅を照らす運動「ウクライナ」支援募金に寄託されます。

陸奥教区は青森・岩手・宮城の三県からなっており、岩手は中尊寺から十二時五十分にバスが出発し、毛越寺を経由して興福寺へと向いました。到着して庫裡に案内されると宮城方面の方は既にいらっしゃっていて、早速托鉢の準備を始めました。まず幟を組み立て、頭陀袋に紐を通し首から掛けられるようにします。衣を着て輪袈裟を掛け、頭陀袋を身につけて笠をかぶります。一通り準備が終わると御住職から御挨拶があり、労いのお言葉をいただきました。

続いて庫裡から少し離れたところにある観音堂へ向います。庫裡を出ると横の六角堂に目がとまりました。水色に塗られたベランダがあり、そして和式の彫刻があり、洋と和の建築が融合された建物の斬新さに驚かされました。庫裡の門を出て少し歩くと山門があり、山門をくぐって石壇を登ると観音堂があります。外側の板壁には、中国から伝わった物語が彫り込まれていて、欄間には十二支が彫られており、内部は色彩豊かに荘厳されています。その鮮やかさに感心したことを覚えています。本尊様の前で一隅陸奥教区理事長が導師となり法楽をさせていただきました。

その後、興福寺副住職から托鉢の班分け、写真撮影の説明があり、観音堂の外に出て写真撮影を行いました。今回の参加は青森からの参加もあり、僧侶三十名、檀家の方は二十名近くご協力いただき、総勢約五十名の参加となりました。そして各班に分かれ、それぞれの班に檀家さんが二名ずつ案内についてくださり出発しました。

興福寺を出るとテニスコートがあって学生が練習をしていたり、田んぼが広がっていたりと長閑な景色が続きます。一軒目のお宅を過ぎ、交通量の多い道路に出たところで、檀家さんの提案で田んぼ道を歩くことになりました。近くに伊豆沼があるからなのか、水鳥が多くいたのですが、我々の振鈴の音に驚いたのか一斉に飛び去ってしまいました。檀家さん曰く、日中は田んぼで餌を食べ、夕刻になると沼の方にいくとのこと。

檀家さんの家々をまわり、お経を唱えさせていただきます。檀家さんの家の前まで来ると、振鈴の音、真言を唱える声が聞こえたのか出てきてくださる方、外仕事をしている中、走って戻って来てくださる方、コタツの中に入りながら手を合わせてくださるご高齢の方、と短い時間でしたが様々な方とお会いすることができました。

浄財をいただき、家内安全を祈りながら経文を唱えます。檀家さんは手を合わせていらっしゃいます。我々も手を合わせながらの読経、そこにはお互いに感謝の気持ちが生まれているような気がしました。

私の班の割り当ては七、八軒でおよそ一時間後には興福寺へ戻りましたが、班によっては歩く距離が長かったり、軒数が多かったりと二時間程かかる班もありました。全員が帰ってきた頃には辺りが暗くなり始めていました。

一隅の托鉢は二年ぶりの開催でした。コロナで人と人との繋がりが変わってきているように感じる中、今回の托鉢に参加して人の温かみに触れる機会を得ることができ、ありがたい一日となりました。

托鉢の開催地を引き受けてくださった興福寺様、付き添いとして一緒に歩いてくださった檀家の皆様には大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

（観音院住職）

興福寺観音堂

奥州三十三観音霊場第十番札所で、地元の人からは「大嶽の観音さん」と呼ばれ親しまれている。

「平泉の文化遺産」関連略年表

■昭和63年（1988）

4月　平泉遺跡群調査指導委員会（事務局 平泉町）設置される。

柳之御所遺跡の大規模発掘調査始まる（～1993）。柳之御所遺跡発掘は世界文化遺産登録への契機となった。

■平成2年（1990）

3月30日　国宝中尊寺金色堂保存施設（新覆堂）改修工事竣工。

7月24日　平泉遺跡群調査指導委員会開催される。「柳之御所遺跡」について委員全員が「都市平泉の中心で保存すべきである」と発言。一関遊水地計画の堤防と平泉バイパス計画の変更を町、建設省（現国土交通省）に要望。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、柳之御所遺跡で平安時代の寝殿造の建物を描いた板材（折敷（おしき）の底板）が出土したとを発表。

11月9日　**中尊寺より、柳之御所遺跡保存に関する請願署名20万人分が提出される。**

■平成3年（1991）

2月　日本考古学協会、日本歴史学協会など歴史学関係7団体が文化庁に柳之御所遺跡保存の要望書を提出。

■平成4年（1992）

12月14日　**平泉遺跡群調査指導委員会、柳之御所遺跡を平泉館跡と断定。**

特別名勝毛越寺庭園の整備事業完了。

■平成5年（1993）

11月　建設省、「北上川遊水地堤防及び国道四号平泉バイパス」建設ルート変更。

柳之御所遺跡保存決定。

■平成9年（1997）

3月5日　柳之御所遺跡、史跡指定。

12月24日　世界遺産登録について県・町初協議。

■平成10年（1998）

8月25日　世界文化遺産「日光の社寺」視察（岩手県、平泉町、中尊寺の関係者）。

9月17日　**平泉町議会9月定例会において、「世界文化遺産登録に向け、推進本部を設けたい」旨、町長発言。**

登録推進の方針が明らかに。

10月18日　平泉文化会議所、講演会「世界遺産を語る」を開催。

柳之御所遺跡発掘調査
昭和63年（1988）、一関遊水地・平泉バイパス建設関連で発掘調査が開始され、平成５年まで調査が行われた。

整備事業完了後の毛越寺庭園

平泉文化会議所講演会開催（平成10年10月18日）
平泉登録の可能性を説いた前奈良国立文化財研究所所長鈴木嘉吉氏。

■**平成11年（１９９９）**
7月24日　平泉ユネスコ協会設立。
■**平成12年（２０００）**
2月2日　岩手県、「平泉の文化遺産」素案を作成。
構成資産として、中尊寺（金色堂・覆堂・経蔵・願成就院宝塔・釈尊院五輪塔）・毛越寺・無量光院跡・柳之御所遺跡をあげる。
4月　岩手県、平泉町周辺を「景観形成重点地域」に指定。
6月　平泉町議会、国立博物館誘致・世界文化遺産登録調査特別委員会を設置。
9月22日　文化庁、文化財保護審議会に対し世界遺産暫定リスト追加候補物件の調査審議を依頼。
11月17日　文化財保護審議会は、世界遺産条約特別委員会を設置し、調査審議を開始。
■**平成13年（２００１）**
1月24日　平泉町世界文化遺産登録推進協議会結成総会。
4月6日　**「平泉の文化遺産」世界遺産暫定リストに登載。**
推薦資産は、中尊寺・毛越寺・無量光院跡・柳之御所遺跡。
12月24日　第1回平泉世界文化遺産登録指導委員会開催。
「登録には約18ヘクタールの史跡追加指定が必要」。
■**平成14年（２００２）**
4月1日　**平泉町、世界遺産推進室を設置。**
6月20日　第1回世界文化遺産登録推進協議会開催。
資産候補として、中尊寺、毛越寺、無量光院、柳之御所遺跡のほか、金鶏山の史跡指定を検討。
12月20日　平泉町、世界遺産推進基金を創設、基金運営委員会を設置。

■**平成15年（２００３）**
2月12日　世界文化遺産登録指導委員会開催。
登録目標年を平成20年とすることで了承。
10月9日　第2回世界文化遺産登録推進協議会開催。
推薦資産が確定。委員に、一関市長、前沢町長及び衣川村長を追加。構成資産の追加を検討。達谷窟・骨寺村荘園遺跡・長者ヶ原廃寺跡、白鳥舘遺跡について、史跡指定に向け取り組むことを了承。
■**平成16年（２００４）**
3月　「復元ＣＧ甦る平泉」（ＤＶＤ）完成。

平泉町世界文化遺産登録推進協議会設立
（平成13年１月24日）

中尊寺大池伽藍跡発掘体験（平成14年３月17日）
千田孝信貫首発掘調査に挑戦。

DVD「甦る都市平泉」完成（平成16年３月31日）
最新の研究成果により作成されたCGが収録され、以後、「平泉」の価値の共有化に貢献した。

4月　**岩手県教育委員会生涯学習文化課に世界遺産担当組織を設置。**
6月24日　**岩手県教育委員会「平泉の文化遺産」世界遺産登録推薦書作成委員会を設置**（これより推薦書作成委員会と表記）。
11月19日　第1回推薦書作成委員会開催（委員長工藤雅樹氏）以後２００６年6月22日まで全6回開催。

■平成17年（２００５）

2月22日　金鶏山、史跡指定。
3月2日　達谷窟、骨寺村荘園遺跡、史跡指定。旧観自在王院庭園、名勝指定。
7月14日　毛越寺境内附鎮守社跡、特別史跡追加指定・名称変更。
柳之御所・平泉遺跡群、史跡追加指定・名称変更。
これにより**白鳥舘遺跡、長者ヶ原廃寺跡は柳之御所・平泉遺跡群に含まれる形で史跡指定された。**
9月18日　読売新聞社主催「世界遺産シンポジウム」開催。
千田孝信貫首が講演、「平泉の文化遺産」について誇りと継承の心を説いた。

■平成18年（２００６）

1月1日　平泉町景観条例施行。
2月20日　奥州市景観条例施行。
4月1日　一関市景観条例施行。
関係市町すべてで景観条例を制定・施行。バッファゾーンに係る法手続き完了。
6月8日　**「平泉の文化遺産」に関する国際専門家会議開催。**
オランダ・中国・韓国の専門家を交えて開催、「平泉」の価値について評価（～11日）。
6月22日　第6回推薦書作成委員会開催、推薦書原案、了承。
7月28日　**一関本寺の農村景観、重要文化的景観に選定。**全資産について法的手続き完了。
9月14日　世界遺産関係省庁連絡会議、政府推薦決定。
12月14日　推薦書完成、資産名「平泉―浄土思想を基調とする文化的景観」。
12月26日　**ユネスコ世界遺産センター、推薦書を受理。**

■平成19年（２００７）

5月21日　保存管理状況現地指導会開催（イコモス現地調査事前準備）。
8月26日　**イコモス現地調査（～29日）。**
調査員　ジャガス・ウィーラシンハ氏（スリランカイコモス国内委員会委員）。
11月6日　イコモス調査員の求めに応じ、「補足情報資料」をイコモスへ提出。
12月18日　イコモス、「平泉」に関して四項目の質問状を送付。追加情報を求める。

■平成20年（２００８）

2月28日　文化庁、イコモスに対し「追加情報資料」を提出。

無量光院復元CG

長者ケ原廃寺跡第７次発掘調査現地説明会
（平成16年11月12日）
平成14年から岩手県立博物館による調査が始まり、以後、継続的に奥州市教育委員会による調査が行われている。

「平泉の文化遺産」国際専門家会議
（平成18年６月８～11日）
６月９日には中尊寺を視察。千田孝信貫首が金色堂、経蔵、讃衡蔵、能舞台を案内された。

3月2日　近藤誠一ユネスコ日本政府代表部特命全権大使「平泉」視察（～3日）。
5月23日　**文化庁、イコモスからの世界遺産一覧表への「記載延期」勧告を発表。**
6月10日　パリ対策会議（パリ・ユネスコ大使館、～13日）。文化庁・外務省・岩手県及び関係市町担当者がパリに赴き具体的な対応策を協議。その後、近藤大使が委員国に対する説明を実施。
6月14日　**午前8時43分、岩手・宮城内陸地震（マグニチュード7・2、平泉震度5強）。**
7月2日　**第32回世界遺産委員会開催、会場　カナダ、ケベック・シティー（～10日）。**
7月7日　**「平泉―浄土思想を基調とする文化的景観」審議終了、記載延期決議（現地時間6日、午後8時36分）。**
日本政府代表団、記者会見。今後の推薦作業については「平泉」を第一とし、平成23年の世界遺産委員会での再審議を目指して取り組むことを表明。
再チャレンジスタート。
9月22日　「平泉の文化遺産」世界遺産登録推薦書作成委員会再開（これより推薦書作成委員会と表記）。
イコモスが示した資産評価の分析、再推薦に向けた新たな価値証明、構成資産の選択等の課題について検討開始。
以後、平成23年7月20日まで10回開催。
11月14日　特別展「平泉　みちのくの浄土」開催（～平成21年4月19日）。
仙台市博物館、福岡市博物館、世田谷美術館の3館を会場に、延べ約20万人が来場。

■平成21年（２００９）

2月21日　「平泉の文化遺産」登録推薦書作成に係る国際専門家との打合せ（於一関市、～23日）。
カナダ・カールトン大学ハーブ・ストーベル准教授、中国・清華大学呂舟教授を招聘。
「浄土世界」を「平泉」の統一的な概念として設定する旨指導を受ける。
4月　平泉町の景観条例を景観法に準拠したものに改訂。
4月4日　「平泉の文化遺産」登録推薦書作成に係る国際専門家との打合せ（於東京都）。
構成資産について、中尊寺、毛越寺、無量光院跡、金鶏山が含まれることは確実。
柳之御所遺跡は都市造営の核として、平成22年推薦に含めることは可能。

白鳥舘遺跡第６次発掘調査現地説明会
（平成19年12月８日）
白鳥舘遺跡の中世城館の堀跡の調査。この後、丘陵裾部の低地に12世紀の遺跡が広がることが明らかとなった。

ドナルド・キーン氏中尊寺訪問
（平成18年７月７日）
岩手日報主催「平泉文化シンポジウム」の途次、中尊寺を訪問された。

近藤誠一ユネスコ日本政府代表部特命全権大使平泉訪問（平成20年３月２～３日）

「平泉―浄土思想を基調とする文化的景観」推薦書完成　（平成18年12月14日）
推薦書にサインする近藤信司文化庁長官。

第32回世界遺産委員会
（平成20年７月２日～10日）
カナダのケベックシティーで開催された委員会で「平泉―浄土思想を基調とする文化的景観」の登録延期が決まった。

イコモス（国際記念物遺跡会議）「平泉の文化遺産」現地調査
（平成19年８月26～29日）

そのほかは、将来的に調査研究の成果が整理できた段階で、「拡張」により構成資産に含めることが適当。との助言を受ける。

4月14日　平泉文化遺産センター開館（旧平泉郷土館を改装）。

4月23日　文化庁・岩手県・一関市・奥州市・平泉町の公式協議。**再推薦の構成資産について合意**。中尊寺・毛越寺（観自在王院跡を含む）・無量光院跡・金鶏山・柳之御所遺跡の5資産で平成23年（２０１１）登録をめざす。

5月19日　**「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」開催（会場　国立奈良文化財研究所、～21日）**。中国、韓国の専門家を交えて、平泉の庭園群について評価。

6月16日　推薦書作成委員会開催。毛越寺から観自在王院跡を分離して6資産とすることに。

9月28日　暫定版推薦書をユネスコ本部世界遺産センターに提出。

11月　重要文化財金色堂覆堂・中尊寺経蔵保存修理工事（屋根葺替・部分修理）竣工（平成19年度からの3カ年継続事業）。

11月21日　「世界遺産登録推薦書暫定版」提出について町民報告会開催。

11月26日　推薦書作成委員会、正式版推薦書原案を了承。**資産名「平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群―」**

12月11日　文化審議会文化財分科会、推薦書提出を了承。

■平成22年（２０１０）

1月18日　世界遺産条約関係省庁連絡会議開催。「平泉の文化遺産」の再推薦を決定。

推薦書提出、ユネスコ世界遺産センターに受理される。

4月1日　平泉町、屋外広告物条例施行。

4月24日　柳之御所史跡公園開園、柳之御所資料館リニューアルオープン。

9月7日　**イコモス現地調査（～9日）**。

調査員　王力軍氏（中国イコモス国内委員）。

■平成23年（２０１１）

3月11日　**午後2時46分、東日本大震災 大津波（マグニチュード9・0、平泉町震度5強）**。

4月7日　**午後11時32分、東日本大震災余震（震源宮城県沖、マグニチュード7・2、平泉町震度6弱）**。**特別名勝毛越寺庭園大泉が池の池中立石が傾く**。

5月7日　**イコモス世界遺産一覧表への「記載」を勧告**。「柳之御所遺跡」の除外及び資産名称の変更を要請。

6月26日　**第35回世界遺産委員会フランス、パリにて開催。「平泉―仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群―」登録決議（現地時間25日午後5時50分）**。

6月29日　**登録認定、「平泉の文化遺産」世界遺産一覧表に正式記載**。

再推薦に向けて国際専門家を招致
（平成21年２月21日）
「清衡公の願い」を説明される山田俊和貫首。

第35回世界遺産委員会　（平成23年６月25日）
フランス・パリで開かれた委員会で「平泉の文化遺産」の登録が決議され、29日に登録認定、世界遺産一覧表に正式記載された。

平泉世界遺産登録記念・東北復興祈願金色堂参拝
（平成23年７月３日）

7月2日　世界遺産登録を祝う町民報告会開催（平泉駅前・無量光院跡）。
11月8日　「平泉の文化遺産」世界遺産登録記念式典挙行。

■平成24年（2012）

2月13日　外務省、世界遺産認定書授与式開催。
9月25日　「平泉の文化遺産」拡張資産として、柳之御所遺跡・達谷窟（平泉町）、骨寺村荘園遺跡（一関市）、長者ヶ原廃寺跡・白鳥舘遺跡（奥州市）が暫定リストに登載。

■平成26年（2014）

3月28日　6月29日を「平泉世界遺産の日」とする県条例公布。

■平成27年（2015）

6月29日　「平和の祈り」を初開催、以降毎年継続。

■平成28年（2016）

4月23日　無量光院跡暫定開園。
9月22日　世界遺産登録5周年式典挙行。
11月27日　重要文化財白山神社能舞台屋根葺替・耐震補強工事竣工。

■平成30年（2018）

6月7日　国宝中尊寺金色堂保存環境調査専門委員会発足（以下、保存環境調査専門委員会と表記）、平成31年3月に検討結果報告書刊行。

■令和元年（2019）

5月20日　「みちのくGOLDロマン―黄金の国ジパング、産金のはじまりの地をたどる」が日本遺産に認定される。

■令和2年（2020）

7月　保存環境調査専門委員会が国宝中尊寺金色堂修理委員会へ移行。
金色堂保存修理工事着手。
12月15日　国宝中尊寺金色堂保存修理工事竣工。

■令和3年（2021）

11月20日　岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター開館。
12月11日　奥山元照貫首町内にて講演。
世界遺産登録10周年記念講演会（於平泉小学校体育館）

■令和4年（2022）

8月18日　第19回「平泉の文化遺産」世界遺産拡張登録検討委員会開催。ユネスコによる世界文化遺産への拡張登録を目指す構成資産を、柳之御所遺跡のみとする案をまとめる。

無量光院にて法要　（平成23年7月2日）
平泉駅前での報告会に先立ち、無量光院跡より金鶏山を望んで法要が執り行われた。

世界遺産登録を祝う町民報告会開催
（平成23年7月2日）
平泉駅前広場には多くの町民が集まり、喜びを分かち合った。

平泉世界遺産認定書授与式
（平成24年2月13日）
ユネスコ事務局長イリーナ・ボコバ氏より認定書が授与された。

「一関本寺の農村景観」重要文化的景観に選定（平成18年７月28日）

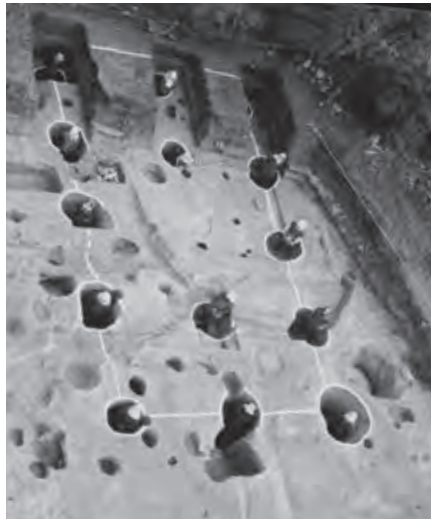
世界遺産登録祈願金色堂参拝（平成22年６月12日）
平成20年７月の世界遺産登録「延期」決議の後、「平泉の文化遺産」は平成23年の登録を目指していた。この日、多くの町民が世界遺産登録を願い金色堂を参拝した。

埋蔵文化財 ―― 眠りから目ざめた遺跡のまち

無量光院第23次発掘調査現地説明会
（平成22年10月30日）
阿弥陀堂前から40㎝四方の大きさの塼（せん：素焼きのタイル）の広がりを確認した。

無量光院第40次発掘調査現地説明会
（平成30年９月29日）
無量光院跡東土塁脇から、無量光院以前の12世紀の石敷遺構を確認した。

志羅山遺跡第118次発掘調査空撮写真
（令和２年11月13日撮影）
12世紀後半を中心とした屋敷地の中には、大型の四面庇建物があることを確認した。



倉町遺跡第４次発掘調査
大型掘立柱建物跡
（平成14年11月20日撮影）
『吾妻鏡』に記された、「高屋」（宝物等を収めた倉）であると考えられる大型建物を確認した。

柳之御所遺跡第69次発掘調査
（左：外堀、右：内堀）
（平成20年11月7日撮影）
内堀と外堀は、二重掘(同時存在)と考えられていたが、内側は外側よりも新しく作られていることが確認した。

新刊紹介

（令和四年一月～十二月）

〈書　籍〉

『摩多羅神――我らいかなる縁ありて』
春秋社　著者：山本ひろ子　八・二十

『もう一つの平泉　奥州藤原氏第二の都市・比爪』
吉川弘文館　歴史文化ライブラリー554　著者：羽柴　直人　七・二十二

『仏教芸術　第九号』
中央公論美術出版　編集：仏教芸術学会　十・十五
※「金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅図の再検討」　佐藤　優　収載

〈報告書〉

『平泉文化研究年報　第22号』
発行：岩手大学平泉文化研究センター・岩手県
編集：岩手県教育委員会事務局　三・三十一

『岩手県平泉町文化財調査報告書第１４０集
特別史跡無量光院跡発掘調査報告書Ⅹ Ⅷ　―第47次調査―』
編集・発行：平泉町教育委員会　三・三十一

『岩手県平泉町文化財調査報告書第１４１集　**平泉遺跡群発掘調査報告書**
祇園Ⅰ遺跡第６次　中尊寺跡第93・95・96次　花立Ⅱ遺跡第27・28・29次』
編集・発行：平泉町教育委員会　三・三十一

『岩手県平泉町文化財調査報告書第１４２集
名勝　旧観自在王院庭園発掘調査報告書Ⅲ　―第12次調査―』
編集・発行：平泉町教育委員会　三・三十一

『令和３年度　骨寺村荘園遺跡村落調査研究報告書』
発行：一関市博物館　三・三十一

『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第34集
骨寺村荘園遺跡確認調査報告書　白山社及び駒形根神社』
編集・発行：一関市教育委員会　三・二十二

『一関ふるさと学習院　文化講座収録　【第七編】』
発行：ＮＰＯ法人　一関文化会議所　三月

一枚の写真から〈5〉

北嶺澄照
（薬樹王院住職）

あの頃の声が聞こえる

中尊寺本坊の広間での一枚。宴席も盛り上がり、「じゃあ、一枚」とパチリ。今から六十数年前、昭和三十年代初頭の一枚です。

昭和二十年（一九四五）に太平洋戦争が終わり、国内では多くの改革が行われ、世の中が大きく変わりました。戦前の中尊寺は観光客も少なく、拝観料収入は寺を維持していくほどのものではなく、三十六町二反（三五・八四ヘクタール）の田畑からの収入が寺の経済基盤となっていました。

ところが、昭和二十二年に実施された農地改革により中尊寺所有の田畑は国の強制買い上げの後、耕作していた人々へ払い下げとなり、寺の収入は激減しました。

その時、「戦争が終わってこれからは平和な時代が続くだろう。中尊寺には貴重な文化財がたくさんある。平泉の歴史と文化を広く全国に発信しよう」と考えた先人達がいて努力を重ねたのです。

昭和二十五年（一九五〇）、金色堂の中に納められている奥州藤原氏の御遺体学術調査が行われ、その様子が新聞・ラジオ・映画ニュースで報道され、平泉・中尊寺の名前が全国に知れわたりました。

その後の金色堂の「昭和の大修理」、毛越寺庭園の整備、柳之御所遺跡の発掘、無量光院跡の中島と池の復元、そして「平泉の文化遺産」の世界文化遺産登録といった、現在にいたる数々の出来事のきっかけが、藤原氏御遺体の学術調査であったと考えています。

この一枚の写真、前列右から順に、まずは観音院の清水秀澄さん。腕を組んでどっしりとした構え。長く教壇に立ち、平泉町長島にかつてあった小島小学校校長で退職。私が中尊寺に勤めた時には一老（長老の最上席）となっておられ、法要と会議の時にお会いするだけだったような気がします。印象的だったのは正月二日の「謡初め」で、腹の底から出るその声は障子紙が震えるのでは、と思うほどの声量だったことを覚えています。

口をすぼめて、ひょっとこの真似でも始めようか、としているのは常住院の佐々木高圓さん。

毎年五月四・五日は白山神社の祭礼で古実式三番（中尊寺の延年ともいわれる）と御神事能（神前に奉納する能楽）が行われます。江戸時代

から明治の神仏分離後も絶えることなく続いてきました。唯一の例外がこのコロナ禍で、令和二・三年は能舞台での法楽（読経）のみ執り行いました。昨年は五月四日に古実式三番と半能「竹生島」を神前に奉納することができました。

今年はコロナ以前のように、四日と五日の番組を奉演することができるよう、祈るばかりです。

中尊寺の能楽は、僧侶がシテ・ワキ・囃子（はやし）・狂言方の諸役を稽古して勤めるところが大きな特色で、これは全国で唯一の例です。

高圓さんはシテ・大皷（おおかわ）・太鼓の三役（三つのパート）を永年勤めていました。ここ半世紀の間に三役を勤めたのは高圓さんお一人でしょう。

あだ名をつけるのが得意だったら

しい高圓さん。私の祖母は明治三十四年（一九〇一）に現在の福島県本宮市に生まれ、祖父が兼務していた同市の高木寺で暮らしていて、終戦後に福島から中尊寺にやってきました。「そうだ、そうだ」を平泉近辺の方言では「んだ、んだ」と言うと思いますが、本宮あたりでは「そだない、そだない」と言います。高圓さんから「そだないババア」とあだ名をいただいた、とある人から聞きました。

大徳院の佐々木教宥さんは温和な表情。実際にお会いしたことはなく、そのお声を聞いたこともないのは残念なことです。

写真の中央で、両脇の二人の肩に手を掛けているのは円乗院の佐々木實高さん。私の「御能（おのう）」の先生。高校に入るまで「御神事能」と呼ばれていることを知らず、稽古の日も本番当日も「御能に行ってきます」といって家を出ていました。小学三年生の時に「橋弁慶」のシテツレ（太刀持）で「御能デビュー」しましたが、太刀持は本来大人の役。右腕を肩の高さにあげて太刀を持っているのですが、どうしても太刀の重さで腕が下がってくる。すると實高さんが「腕が下がっとるーっ」と大きな声で叱る。普段の稽古場は円乗院で、そこから「えーん、えーん」と稽古のたびに泣きながら家に帰っていました。それなのに「御能」が嫌いにならなかったのはなぜなのか……。不思議なことです。

その隣、背広姿の方の名前がわかりません。寺の長老たちにも写真を見せましたが、「わからない」とのこと。もしかすると、文化財保護委員会（現文化庁）の文化財調査官ではないだろうか。当時は文化財収蔵庫建設、防火水道整備、金色堂諸仏の修理、と続けて大きな国庫補助事業が行われていました。また、金色堂の保存解体修理の実現を強く願っていた時期で、可能性はあると思います。

笛を吹く真似をしているのは地蔵院の佐々木亮徳さん。若い頃、東京上野の寛永寺で修行されていたとのこと。絵がお上手で、私の祖母の古希祝いに、金色堂巻柱の円相光仏を紺色の色紙に金泥で画いたものを頂戴しました。「親父は絵描きになりたかったんだ」という話を現地蔵院住職の佐々木秀圓さんから聞きました。

後列、右は円教院千葉快恩さん。

葬儀の際、快恩さんが御導師、小僧役が私、ということが何度もありました。わからないことを尋ねると親切に教えてくれ、その後に「北本老僧（祖父北嶺亮詮のこと）から教わりました」というのが決まり文句。

昔語りもお好きで、

「戸河内（中尊寺の奥にある集落）、で葬儀があると馬車に乗せられていったこともあります。当時葬儀は午後の一時か二時に始まることが多く、日の短い時は一泊してきたこともありました。小田原提灯で北本老僧の足下を照らして歩いたこともあります」

と、いう話も伺いました

そういえば、子供の頃、納戸には破れた小田原提灯がありました。提灯は時代劇でしか見たことがなかった私は「何に使ったんだろう」と不思議に思っていましたが、昭和三十年代初頭、提灯は日常的に使われていたのでしょうか。

その隣の「若い者」の話は最後にして、長髪のダンディーな背広姿の方、知らない人がこの写真を見れば、

「来客は背広のお二人ね」

と思われるでしょうが、然に非ず。大徳院教宥さんの次の住職賢宥さん。檀家の葬儀で御導師賢宥さん、私が小僧役ということは快恩さんと同様、何度もありました。母とは縁戚関係だったらしく、

「不二ちゃん（不二子、母の姉）は家に遊びに来て泊まって行ったこともあるんだよ。澄照君とこの直ちゃん（私の母）は年が離れていたから、来たことはなかったなあ」

仏事のこと、私の母の兄姉のこと、いろいろ教えてもらいました。

賢宥さんのエピソードといえば「大阪キャバレー事件」。昭和三十年代半ば、大阪のデパートで「中尊寺展」が開催されました。デパートの関係者か誰かとキャバレーに入ったところ、大阪国税局の人だと勘違いされて、ロハで豪遊したとかしないとか……。

その隣の方、とても笑顔がすばらしいですね。寺の長老方に誰なのかお話を伺いました。しかし、なぜなのかわからないのですが、どうも確答ではないような気がして、気持ちがスッキリしない日々が続いていたある日、平泉町長島の満福寺住職千葉亮賢さんが本坊に来ましたので写真を見せましたところ、

「多門亮深さんだよ。懐かしい写真だなあ。半世紀以上前の写真だろう。どこから出てきたんだい。君の家からか。真ん中の若いの、あゝ、これ澄仁さんだものね」

多門亮深さんは一関市舞川の観福寺住職多門真咲さんの伯父さんとのこと。

「心優しい人だったよ」

とは亮賢さんの談。

「お酒が好きな人だったなあ」

と、秀圓さん。

最後の一人、後列真ん中の「若い者」は師父澄仁。地元の高校を卒業後、比叡山の叡南祖賢大和尚にお仕えしながら僧としての在り方を学んでいました。

四十年ほど前に、ある長老から聞いた話では、

「澄仁君は跡取りでなかったら七つの海を渡る船乗りになりたかった、と言っていたらしい。比叡山の麓、律院で叡南大和尚にお仕えして二年が過ぎた頃だったと思うが、中尊寺から『若い者がいなくて困っとるからと戻ってこい』と言われて戻ってきたんだ」

とのこと。

澄仁にも逸話があり、「鉄道切符事件」。この写真が撮られて数年後、法華大会広学竪義履修のために同世代の山内瑠璃光院の菅野最純さん、一関市永泉寺の中臣實亮さんの三人で比叡山へ。帰りにどこかで打ち上げ会をしたまではいいが、京都駅で帰りの切符を買おうとしたらお金が足りない。改札をどう突破したのか知りませんが、二人分の乗車券で三人が帰ってきたらしい。車掌に見つかり、悪質と判断されれば鉄道公安官に引き渡されるかもしれない。中尊寺に連絡されると、寺に戻れば散々油を絞られることになる。三人は必死に入れ替わり立ち替わりトイレに隠れ、或いはデッキの隅に顔を隠してしゃがみ込み、何とか無事に帰ってきた、と伝わっています。

また、澄仁曰く、

「金色堂の大修理が昭和四十三年に竣工して、その後中尊寺の財政基盤はしっかりしたものになっていった。昭和二十年代、三十年代は所謂『自転車操業』の時もあってね。その場合は、十一月か十二月に運転資金を金融機関から融資してもらっていた。そのために金融機関の人たちをもてなす忘年会をしていたんだよ。今は立場が逆

になって、この前澄照は接待忘年会に行って来たね」

昭和六十三年五月に私が中尊寺事務局出仕となった頃は、平成三年（一九九一）のバブル崩壊前で、接待忘年会あり、職人さん達との忘年会、地元青年会の忘年会に寺の忘年会、何時だったか忘れましたが、十一月下旬から年末までに十三回忘年会があった年があり、全部出席したら肝臓が悲鳴を上げていた、そんなこともありました。

今回のタイトルは「あの頃の声が聞こえる」なのに、未だにそのことに触れていません。大いに道草を楽しんでしまいました。

今から六十数年前に撮られたこの一枚、あまり貧しさや暗い様子は感じません。しかし、「おもてなし」の席なので、前列の文化財保護委員会の文化財調査官と思しき方のために、普段口に入れることがなかなかできない物も含め、精一杯のごちそうが用意され、酒も豊富に用意されていたのでしょう。中尊寺には文化財関係のほかにも課題が山積していた、と想像はつきます。それでも、悲観主義に陥っている暇もない。その日その日を乗り越えていこうとする、前向きな様子がこの写真から感じられます。前列背広姿の方の消息は存じ上げません。この写真に写っている僧侶の方々全員が安楽世界へと旅立ってしまいましたが、六十年以上前の明るい声や冗談が聞こえる。寺の将来について、熱い口調で語っている人の声も聞こえる。そういう一枚だと思うのです。

過去四回の連載は平均六〇〇字ほどだったものが、なんと、その七倍以上となってしまったのは、この一枚に写っている人達が私の筆を走らせたのだろう、そう思っています。

〔関山句嚢〕

〈第六十一回　平泉芭蕉祭全国俳句大会より〉

（令和四年六月二十九日　於毛越寺）

（當日句入選）

群れ咲いてあやめ浄土となりにけり　（大会長賞）
＊小澤　實選　特選　盛岡　齋藤　雅博

楸邨碑六十五屯也炎暑　（毛越寺貫主賞）
特選　大崎　佐々木克狼駄

清衡の願文此処に深みどり　（中尊寺貫首賞）
特選　大崎　木村　一枝

清衡の夢のかけらを夏の蝶
秀逸　一関　三浦ことぶき

老鶯や義経妻子の墓あたり
秀逸　奥州　大石　文雄

もしかして翁隠密落し文
秀逸　奥州　岩渕　正力

万緑のつつむ浄土や毛越寺
秀逸　奥州　佐藤　年末

夏帽脱ぎ薬師如来に一礼す
秀逸　奥州　佐藤　靖子

円仁の供花となりたる花菖蒲
佳作　平泉　北嶺　澄照

目瞑れば失せし堂宇も梅雨の寺　（岩手県知事賞）
＊白濱一羊選　特選　奥州　佐藤たけ子

英訳の三行句碑や平泉の日　（河北新報社賞）
特選　盛岡　佐藤　明彦

補聴器を外して涼し石仏　（岩手日報社賞）
特選　平泉　佐々木邦世

高館の坂を急かせる行々子
秀逸　大崎　佐々木れい子

師の杖となりたき一日あやめ寺
秀逸　奥州　齊藤　瑞子

梅雨晴れの松の手入れや高梯子
佳作　盛岡　伊藤　恵美

万緑の中に浄土の池澄めり
＊小畑柚流選　特選　大崎　木村蛍雪子（岩手県議会議長賞）

花菖蒲ただ一心に今日の色
特選　奥州　村上眞理子（岩手日報社賞）

梅雨晴の水を舞台に蝶の舞
特選　一関　砂金　眠人（中尊寺賞）

若竹の風の近道光堂
秀逸　盛岡　二階堂光江

雲に乗る心字ヶ池のあめんぼう
佳作　平泉　岩渕　洋子

楸邨碑六十五屯也炎暑
＊小林輝子選　特選　大崎　佐々木克狼駄（平泉町教育長賞）

法灯も戦火も尽きず蟻走る
特選　盛岡　和田　タケ（岩手日日新聞社賞）

曇天といふ煌めきに花あやめ
特選　大崎　鈴木　勝也（毛越寺賞）

くろ縫うて棚田のあやめ楽しめり
秀逸　一関　稲玉　宇平

遣水の取水口白花茨
秀逸　一関　千葉志津子

法灯も戦火も尽きず蟻走る
＊渡辺誠一郎選　特選　盛岡　和田　タケ（平泉町議会議長賞）

万緑も世界遺産や平泉
特選　奥州　遠藤カオル（岩手日報社賞）

賽銭のころげる句座の平泉の日
特選　奥州　青沼　利秋（岩手日日新聞社賞）

池の面を草刈音の浄土かな
秀逸　北上　鉄本　正人

暑き世を余さず生きて浄土池
秀逸　気仙沼　石川喜美子

遠き世の庭に拾ひし落し文
＊照井　翠選　特選　大崎　木村　一枝（平泉観光協会長賞）

法灯も戦火も尽きず蟻走る
特選　盛岡　和田　タケ（河北新報社賞）

毛越（けごし）てふ延年の郷あげは舞ふ
特選　一関　江原　遅筆（岩手日日新聞社賞）

ウクライナへ願文百貫花あやめ
秀逸　奥州　服部　常子

あやめ咲く浄土の池を光背に
秀逸　盛岡　相馬　定子（ていこ）

緑蔭に礎石の黙す夢の跡
佳作　横浜市　福井みつ子

（応募句入選）　（投句総数　九六八句）

＊小澤　實選

天　阿弖流為（アテルイ）の国や畦火の狼煙（のろし）めく
秋田市　岩谷　塵外（じんがい）

句評　阿弖流為は平安初期、北上川流域を支配した蝦夷の族長、朝廷軍を破りもした。坂上田村麻呂に降伏し、河内で斬殺された。春の畦火に蝦夷の狼煙を感じとるロマン。悲劇の将への強い思いも感じとれる。

地　遠足の子ら静まりぬ光堂
大崎市　京極　久也

句評　遠足の子らといえば、にぎやかな声を立てるものというのが本意だろう。しかし中尊寺の光堂に来れば、その子らも静まってしまう。それほどの荘厳さがこの堂にはあるのだ。

人　鬼房の国の残雪ほとぼれり
宮城県　水戸　勇喜

句評　佐藤鬼房は塩竈の俳人だが、みちのくの風土と向き合い詠み続けた。鬼房の国とはみちのく全体を指そう。「みちのくは底知れぬ国大熊生く（おやし）」。残雪のほとぼりにみちのくの風土のぶ厚さと鬼房の温もりを思う。

秀　逸

能舞台喜多流が舞ひ夏蝶も

奥州市　小野寺洋一

＊白濱一羊選

天　**一つ一つは淋しがり屋の葱坊主**

松阪市　宇留田（うるた）敬子

句評　名前からしてユーモラスな「葱坊主」だが、作者は淋しがり屋だという。永田耕衣の「夢の世に葱を作りて寂しさよ」が思い出される。

地　**香水を一滴落す柩かな**

常陸太田市　舘　健一郎

句評　故人の愛用していた香水なのだろう。火葬前の納めの式の時だろうか。柩の中に一滴落として別れを告げた。

人　**遠足の子ら静まりぬ光堂**

大崎市　京極　久也

句評　それまではしゃいでいた遠足の子ども達も、光堂の荘厳さに静まり返った。今までもこういうシーンは繰り返されてきたのだろう。

秀　逸

篝火に浮かぶ異界や薪能

青森市　加藤健一郎

＊小林輝子選

天　**古の花の束稲（たばしね）山今に猶**

一関市　野村ときえ

句評　西行法師の古歌をふまえての一句。束稲山と桜は永遠のものです。この句の下五「今に猶」が効いています。

地　**遠足の子ら静まりぬ光堂**

大崎市　京極　久也

句評　にぎやかだった子供達が世界遺産中心、光堂に入った瞬間の様子が非常によく伝わってきた一句です。堂内の荘厳さも伝わってきます。

人　**蕗の芽の廃寺に一つ基衡忌**

平泉町　岩渕　洋子

句評　平泉には沢山の廃寺跡があります。その跡に蕗の芽が一つ出ていた。長い冬の終わり、いち早く出る蕗の芽。二

秀　逸

平泉の日老いてまた読むトルストイ

花巻市　土川喜代子

＊小畑柚流選

天　**満開という静かさや古代蓮**

青森市　加藤健一郎

句評　古代蓮が咲き乱れる毛越寺の庭園。満開の時に訪れた作者は、その静けさに息を凝らして見入ったのである。

地　**巫女舞の果てたる舞台飛花落花**

一関市　小野寺束子（つかこ）

句評　舞台の最後を飾って巫女舞も終わり、静寂を取り戻した舞台へ、落花の舞が続くのであった。

人　**囀を飼ひ馴らしたる老樹かな**

盛岡市　齋藤　雅博

句評　老木も小鳥達の囀に生気を取り戻している。あたかも小鳥達を飼い馴らしているようだとの把握は詩情。

代目基衡公の忌日は三月十九日と伝えられています。

秀　逸

旅人の句碑に囁く夏の萩

奥州市　沼倉　規子

＊渡辺誠一郎選

天　**空高く本家分家の鯉のぼり**

大崎市　鈴木　勝也

句評　爽快に空を泳ぐ五月鯉の姿が良く見えます。本家と分家の鯉のぼりは、同じようにして違うのでしょう。何代にもわたって、それぞれの鯉が、子どもたちの将来を願って、五月の空を泳いできたことを想像させます。

地　**畑まで稚（やや）見せに来る麦の秋**

奥州市　羽藤　焼石（しょうせき）

句評　深刻さを増す少子化の今日。農作業をしている畑まで、赤ん坊をわざわざ見せに来た嬉しさ、喜びが溢れるように伝わってきます。

人　ぼうたんや帯解くごとく崩れ落つ
気仙沼市　石川喜美子

句評　牡丹の花は、芍薬の花とともに、美人に喩えられてきました。花が散る様子を、「帯解くごとし」と捉えたのは、まさに妖艶にして鮮やかです。牡丹の花は、散ってもなお哀れが残り、美しさを失いません。

秀　逸
川風を軽しと思ふ更衣
高松市　岡田　貞幹（ていかん）

＊照井　翠選

天　千年も色を継ぎ足す蓮かな
大崎市　門間としる

句評　蓮は千年間ただ咲いてきたのではない。一年一年、色を継ぎ足し、深めてきたのだ。だからこそ私達は蓮に、花の色に感動するのだろう。

地　花筏国をはなるゝ国のあり
奥州市　阿部　靖

句評　昨今のウクライナ情勢を思い浮かべた。民族や文化圏という「国」を訳あって離れていく「国」がある。「花筏」が効いてくる。

人　千年の閂（かんぬき）はずし夏来る
青森市　雪田　樹理

句評　虚構も表現もスケールが大きい。一句から「千年の閂」が見えてきて驚かされた。

秀　逸
平泉の日千年のちを戦（いくさ）とや
気仙沼市　熊谷　正子

（秀逸、佳作は編者が適宜に掲出）

岩手県内　小・中学校の部　（投句総数一一七九句）

岩手県内小学校

特　選
春一番あきらめないでパスをする
金ケ崎町立永岡小学校　五年　新岡　春馬

桜もちあまさしょっぱさハーモニー
二戸市立福岡小学校　三年　末松　花音

春になり山びこたちが目覚めたよ
金ケ崎町立永岡小学校　五年　高橋　陽咲

岩手県内中学校

特　選
咲いたよと風で知らせる花便り
花巻市立西南中学校　一年　高橋　美桜

桜の木花びらキャッチできるかな
花巻市立西南中学校　一年　照井　湊愛

新生活春風ともに動き出す
花巻市立西南中学校　一年　藤原　颯

平泉小学校

特　選
胸おどる藤原祭りのマーチング
六年　佐藤琥士冴

つばめ来る新品せおうランドセル
六年　瀧澤　実央

この春は新人戦でホームラン
五年　佐藤　颯翔

長島小学校

特　選
こいのぼりさくらみながらうれしそう
一年　千葉　彩夏

ふきのとうきのうは2こきょうは5こ
一年　岩渕　柊

ねこたちがひなたぼっこでおおあくび
二年　三浦　唯花

平泉中学校

特選

遣水に花筏浮く毛越寺
二年　岩淵　歩大

教室に吹き抜けてゆく春の風
三年　菊地　奈央

今年こそコロナをとばして夏祭り
一年　小岩あかり

平泉金色堂

鞘堂に鞘堂欲しや五月雨るる
『樹氷』七月号　白濱　一羊

雨雫緑走れり光堂
『草笛』八月号所収　船山　邦子

みちのくの蛍あつまれ光堂
「河北俳壇」　宮城県大崎　菊地　白尾

西山　睦　評

〈夏草や兵どもが夢の跡〉と芭蕉が詠んだ平泉。その藤原三代の栄華の象徴は、光堂。草葉の陰に散った魂を思えば、象徴とも言える蛍火は、数知れない。今こそ鎮魂の光を点そうと呼び掛ける。

蕉翁の像に翳濃し青楓
奥州市水沢俳句大会　秀逸　奥州市　佐藤たけ子

新しき足袋の小鉤や謡初
「たばしね」一月号　北嶺　澄照

束稲山を余花の間に透かしけり
「たばしね」五月号　岩渕眞理子

春雪に筋目立てて中尊寺
『暖響』七月号所収　佐藤　瑞穂

薄衣の女寄り合ふ中尊寺
藤の花散華なりせば光堂
金色の弥陀の笑窪や二重虹
『暖響』八月号所収　近藤　柊雨

秀衡の山河染めゆく秋夕焼
『草笛』二月号所収　小野寺東子

開戦日般若心経唱へけり
『草笛』二月号所収　岩渕　洋子

夏来たる僧の法衣のひるがへり
『草笛』八月号所収　小野寺東子

本堂の読経の響き余花の雨
葉桜の風吹き抜ける能楽殿
『草笛』八月号所収　金　淳子

あれこれと令和の闇に大文字
「たばしね」九月号　佐々木邦世

鐘楼は紅葉明かりの中尊寺
「たばしね」十一月号　熊谷　初巳

人の世の旅の途中の秋惜しむ
「たばしね」十一月号　阿部　義美

今生に訪ねる蓮の中尊寺
〈お便りに〉守谷市　荒木　清

第六十二回　平泉芭蕉祭全国俳句大会
令和五年六月二十九日（木）
会場　中尊寺光勝院

特別選者・講師　**渡辺誠一郎**　先生
（「小熊座」前編集長／朝日「みちのく俳壇」選者）

〔関山歌籠〕

〈第四十二回西行祭短歌大会〉

（令和四年九月三十日）

＊坂井　修一選

夕陽背に今し現る立佞武多居合すわれらリリパット人
（中尊寺貫首賞）
山口県　山縣満里子

コルヴィッツの彫刻にみる母の涙戦さの歴史は未だ続けり
（平泉町長賞）
千葉県　平野　則子

年に一度妻の帰りてくる日なり赤き炎の迎え火を焚く
（平泉観光協会長賞）
奥　州　羽藤　堯

佳作

菖蒲湯の香り失せたる仕舞風呂葉を折りながらゆるゆる浸かる
一　関　阿部　昭代

太古より時の流れの中に降る椎の実の音ひそかなる秋
一　関　松村　雅子

来客の予定はないが玄関に貼り紙しておく裏の畑と
一　関　千葉　利二

亡き夫が掴み歩きし手摺りをば縋りて立ちて空を見上げる
平　泉　晴山　京子

吹くほどに深まりゆける秋の色クラリネットの音やはらかに
青森県　木立　徹

駅前の歩道をゆっくり進む娘よ白杖の音リズミカルなり
千葉県　上田　康彦

短冊の歌は啄木「ふる里の」ホームに響く南部風鈴
（岩手日報社賞）
一　関　千葉　貞子

割り算の余りのやうな人生を病みたる夫は懸命に生きむ
（ＩＢＣ岩手放送賞）
熊本県　石橋　和枝

遺構となりて校舎ありたりあの日々のごとくに子らの声が聞ゆる
（岩手日日新聞社賞）
宮城県　大和　昭彦

この坂を下れば君の生れし町やがて見えくる紅花畑
奥　州　小野寺正美

山脈につづく牧原子と歩む流星群の空みつめつつ
盛　岡　藤井　永子

第四十三回　西行祭短歌大会
令和五年四月二十八日（金）
会場　中尊寺光勝院

特別選者・講師　藤原龍一郎　先生
（日本歌人クラブ会長／「短歌人」編集委員）

御神事能番組

令和四年五月四日

法楽
古実式三番

開口　佐々木五大　大皷　三浦　章興
祝詞　佐々木亮王　小鼓　菅原　光聴
若女　清水　秀法　笛　菅野　澄円
老女　破石　晋照　後見　千葉　快俊

半能　竹生島　シテツレ　佐々木五大
シテ　北嶺　澄照
ワキ　佐々木亮王
太鼓　三浦　章興
大皷　佐々木宥司
小鼓　菅原　光聴
笛　清水　秀法

秋の藤原まつり　中尊寺能　十一月三日

連吟　平泉　二葉きらり園　園児三十五名

鞍馬天狗　老松

仕舞　一関喜桜会
三輪　小川みどり
野宮　千葉万美子

素謡　一関喜桜会
山姥　シテ　佐藤　健也

能　枕慈童　シテ　佐々木五大
ワキ　佐々木秀厚
太鼓　三浦　章興
大皷　佐々木宥司
小鼓　菅原　光聴
笛　清水　秀法

〔陸奥教区宗務所報〕　第二部　中尊寺関係

令和三年十二月一日～令和四年十一月三十日

□ 令和四年

四月二十九日～四月三十日　於延暦寺
　総本山駐在布教　瑠璃光院　菅野　康純
九月十四日　於天台宗務庁
　天台宗人権啓発公開講座　委員　三浦章興参加
十月二十六日　於中尊寺
　一隅を照らす運動陸奥教区本部研修会
　山内より十三名参加
十一月二十六日　於興福寺
　天台宗一斉托鉢　山内より八名参加

□ 役職任免

（令和四年四月一日）
天台宗典編纂所　編纂委員
　円乗院　佐々木邦世
天台宗典編纂所電子仏典員
　瑠璃光院　菅野　康純
天台宗総合研究センター研究員
　真珠院（副）　菅野　澄円
陸奥教区布教師会会長
　瑠璃光院　菅野　康純
（令和四年七月一日）
天台宗人権啓発委員会委員
　法泉院　三浦　章興
天台宗布教師会理事
　瑠璃光院　菅野　康純
（令和四年九月一日）
天台宗人権啓発委員会企画委員
　法泉院　三浦　章興

□ 教師補任

（令和四年四月二十一日）
権大僧都　円乗院（副）　佐々木五大
中律師　大徳院　佐々木宥司

（令和四年十一月二十九日）

権律師　　積善院（嗣）　佐々木祐輔

□ 経歴行階履修

（令和四年九月十一日）

開壇伝法履修　　瑠璃光院（嗣）菅野　靖純

（令和四年十月七日～十一月十一日）

四度加行履修　　積善院（嗣）　佐々木祐輔

□ 逝去

（令和四年六月三十日）

円教院寺婦　　千葉　年子（九十三歳）

一隅を照らす運動全国一斉托鉢　陸奥教区　興福寺　令和４年11月26日

浄財御奉納者 御芳名

令和三年十二月～令和四年十一月

一関信用金庫　平泉支店様	三万円
千葉勝子様	四万円
㈱空地音ハーモニー様	三万円
㈲平泉観光写真社様	十万円
立正佼成会　花巻教会様	三万円
公益社団法人　能楽協会様	十五万円
浄土宗教誨師会様	三万円
千葉喜一様	十万円
泉倉寺　一島正真様	三万円
最勝寺様	五万円
吉村ゆきその様	十三万円
東漸寺　小山様	七万円
幕田魁心様	二十万円
最勝寺様	五万円
佐々木宗生様・佐々木多門様	三万円
最勝寺様	八万円
鈴木紀子様	三万円
富岡八幡宮神輿総代連合会　八鳩会様	六万円
木場木遣保存會様	三万円
浄土宗教誨師会様	五万円
菊池國雄様	五万円
浄土宗　岩手教区教務所様	八万円
達磨会・五蘊会様	十二万円
小田島節子様	十万円
茶道裏千家淡交会　岩手南支部様	六万円
浅井和春様	十万円
最勝寺様	三万円
泉蔵院様	十万円
東叡山　泉福寺　清水英雄様	三万円
大光普照寺　百田成良様	三万円
喜多院　塩入秀知様	三万円
天台宗埼玉教区様	十五万円
一関ユネスコ協会　佐々木文子様	三万円

（順不同）

赤堂稲荷鳥居建立寄進 御芳名

令和三年十二月～令和四年十一月

平泉町	㈲プロフィット様	一基

不動尊篤信御奉納者 御芳名

令和三年十二月～令和四年十一月

世田谷区	国際興業　小佐野隆正様	二十万円
青森市	佐々木幸子様	十七万二千円
中野区	中村武司様	十四万五千円
金ケ崎町	㈱板宮建設 代表取締役社長　板宮一善様	六万五千円
大田区	鈴木敏弘様	六万円
一関市	㈲豊隆軌道　会長　千葉幸八様	五万五千円
秋田市	木村英夫様	五万二千円
平泉町	㈱北都高速運輸倉庫東北 小野寺勝彦様	四万円
栗原市	澤邉幸隆様	四万円
一関市	㈲豊隆軌道　千葉美樹様	四万円
釜石市	中川　潤様	四万円
一関市	橋本晋栄様	四万円
一関市	橋本友厚様	四万円
千葉市	渡邉良弘様	四万円
中野区	㈲シー・エヌ・エス　中村武司様	三万五千円
名取市	㈱OurVoice様	三万円
真岡市	㈱丸茂様	三万円
銚子市	㈱イクオリティー　石毛裕之様	三万円
銚子市	石毛裕之様	三万円
平泉町	一関信用金庫　平泉支店様	三万円
一関市	及川元一様	三万円
栗原市	大山　了様	三万円
北上市	小澤沙智様	三万円
一関市	小野寺清一様	三万円
一関市	小野寺ヤヨヒ様	三万円
栗原市	㈲金成工務店様	三万円
仙台市	齋藤　哲様	三万円
仙台市	佐々木京華様	三万円
栗原市	佐藤光浩様	三万円
仙台市	佐藤優太様	三万円
一関市	山平様	三万円
一関市	割烹炉ばた一八　渋谷正幸様	三万円

北秋田市	清水　智様	三万円
塩釜市	庄内千恵様	三万円
一関市	白石英明様	三万円
一関市	㈱精茶百年本舗様	三万円
横浜市	瀬下　聡様	三万円
栗原市	太齋　浩様	三万円
奥州市	千葉雅史様	三万円
一関市	東北建工企業㈱　今野幸宏様	三万円
一関市	㈱東北鉄興社　和田弘美様	三万円
仙台市	㈱橋場総設様	三万円
一関市	㈱アーク　橋本晋栄様	三万円
平泉町	㈱フタバ平泉　梅村次彦様	三万円
一関市	松本哲也様	三万円
八王子市	村上秀行様	三万円
川崎市	村上　博様	三万円
黒石市	㈱池田不動産　池田裕章様	季毎御供物
黒石市	㈲セイリュウ　佐々木政秀様	季毎御供物
青森県 南部町	㈲工銀青果　工藤一男様	季毎御供物
二戸市	㈲岩食商事　米沢　励様	季毎御供物
弘前市	笹隆　治様	季毎御供物
新潟市	松原晴樹様	季毎御供物
黒石市	池田地建　池田裕章様	季毎御供物
大仙市	㈲ベル美容室　髙橋紀美世様	季毎御供物
水戸市	つくし　藤枝恵枝子様	季毎御供物
大館市	北秋生コン㈱　加賀谷正子様	季毎御供物
滝沢市	福士歯科医院　福士宏也様	季毎御供物
盛岡市	蟻川ひろみ様	季毎御供物
北上市	玉井寛徳様	季毎御供物
平泉町	岩間智子様	季毎御供物
金ケ崎町	石川弘人様	季毎御供物
平川市	長尾智子様	季毎御供物
弘前市	鎌田照美様	季毎御供物
青森市	唐牛正治様	季毎御供物
小樽市	村口初男様	季毎御供物
富良野市	野村農園　野村　隆様	季毎御供物
さいたま市	細渕ます美様	季毎御供物
栗原市	菅原一郎様	季毎御供物
大崎市	渡邊憲幸様	季毎御供物

一関市　㈱精茶百年本舗様　衡年茶五〇〇個
高崎市　大門屋物産㈱様　金色ダルマ（特大）二体
（順不同）

世界各地の度重なる紛争や戦争が終わり、幸せな日々が訪れることを心よりお祈り申し上げます。犠牲となられた方々に対し、心からお悔やみ申し上げますとともに、被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。

関山中尊寺

法華経一日頓写経会

六月十一日（第二日曜日）午前十時より

六万九千余字よりなる法華経八巻に開経と結経を加えた一部十巻を一日の内に書写しあげる写経会。

奥州藤原氏二代基衡公が、亡父清衡公を追善供養するために修したという善業に倣い、平成九年より毎年開催しております。

現在も続く写経風景
（6月第2日曜日／法華経一日頓写経会）

詳細は、中尊寺事務局法務部までお問い合わせください。☎〇一九一（四六）二二一一

執務日誌抄

令和三年十二月一日～令和四年十一月三十日

令和三年

◇十二月

一　日　月次大般若（本堂）
　　平泉町交通安全運動推進町民大会（於長島体育館）
二　日　九州国立博物館森實氏来山（収蔵品貸出）
七　日　平泉観光協会理事会（執事長）
　　薬師会（讃衡蔵）
十一日　貫首　講演（世界遺産登録十周年記念講演会　於平泉小学校体育館）
　　「世界遺産登録十周年記念事業」閉会式（貫首、執事長　於平泉小学校体育館）
十二日　骨寺村荘園米奉納
十三日　北東北観光キャラバン（～十四日、総務五大）
　　弥陀会（讃衡蔵）
　　初詣警備会議（総務・管財　於芭蕉館）
十六日　山形宮城観光キャラバン（総務秀法）
十七日　仙台観光キャラバン（総務澄円）
　　白山会（本堂）
十九日　お経を読む会（積善院）
二十三日　中尊寺節分講中総会（執事長・法務　於平泉文化遺産センター）
二十四日　文殊会（経蔵）
二十八日　恒例御供餅つき
三十一日　午後三時　一山総礼
　　NHK「ゆく年くる年」中継

◇一月

一　日　〇時　新年祈祷護摩供修行
　　七時半　東山町〈若水送り〉着
　　九時　正月祈祷護摩（本堂）
　　十時半　総礼
　　修正会　釈迦供（本堂）
二　日　九時　正月祈祷護摩（本堂）
　　修正会　薬師供（峯薬師　讃衡蔵）
　　午後三時　謡初め（庫裡広間）
三　日　九時　正月祈祷護摩（本堂）
　　修正会　山王供（本堂）
　　十一時半　元三会　慈恵供（本堂）
四　日　修正会　熊野供（瑠璃光院薬師堂）
五　日　修正会　文殊供（経蔵）
　　大般若会（利生院弁財天堂）
　　寒修行（行者三名、町内托鉢。寒の入り～節分）
六　日　修正会　釈迦供・月山御法楽（釈迦堂）
七　日　修正会　白山十一面供（本堂）

大般若会（本堂）
修正会　弥陀供（金色堂）
役席　春の能番組を諮る
修正会　薬師供（讃衡蔵）
八　日　一字金輪仏・千手観音法楽
修正会結願
十四日　**慈覚会**（御影供　本堂）
お経を読む会（執事長）
讃衡蔵運営委員会
光勝院建設委員会
十八日　第二五七世天台座主森川宏映猊下本葬（貫首、随行五大　於天台宗務庁）
二十二日　タイ観光博覧会（リモート参加　総務・管財晋照）
二十三日　**文化財防火訓練**
二十八日　平泉観光協会理事会（執事長）
◇**二月**
一　日　月次大般若（本堂）
三　日　節分会（日数心経　本堂）
四　日　平泉町観光関係団体新型コロナウイルス感染症対策会議幹事会（執事長　於平泉観光協会）
五　日　令和四年厄年祈祷会（歳男歳女二十五名）
七　日　第三回世界遺産登録十周年記念事業実行委員会幹事会（総務澄円　於役場）
十四日　第二回世界遺産登録十周年記念事業実行委員会総会（執事長　於役場）
涅槃会御逮夜（本堂）
十五日　**涅槃会**（本堂）
お経を読む会（金剛ノ晋照）
十六日　浄土宗教誡師会理事長様来山（執事長・総務・管財・法務）
十八日　「秀衡桜の子孫木」寄贈式並びに植樹式（執事長　於平泉町学習交流施設用地内）
二十一日　平泉観光協会理事会（執事長）
二十二日　平泉町上下水道事業運営協議会（管財晋照　於役場）
二十五日　平泉観光協会通常総会（執事長　於平泉観光協会）
◇**三月**
一　日　月次大般若（本堂）
讃衡蔵運営委員会
平泉町文化財調査委員会（管財章興　於平泉文化遺産センター）
八　日　讃衡蔵運営委員会
十一日　東日本大震災慰霊法要（貫首ほか　於陸前高田市小友地蔵尊）
東日本大震災物故者追善回向祥月命日法要（本堂）
十五日　平泉町世界遺産推進基金運営委員会（執事長　於平泉文化遺産センター）
平泉観光協会理事会（執事長）
十七日　中尊寺菊まつり協賛会役員会（光勝院広間）
十九日　**基衡公御月忌**（胎曼供　本堂）
お経を読む会（金剛院）

二十一日　春彼岸会法要（法華三昧　本堂）
檀徒総代・世話人会総会（執事長・法務ほか　於光勝院）
二十二日　平泉商工会創立六十周年記念式典（執事長　於武蔵坊）
二十四日　開山会（護摩供　開山堂）
春期定例一山会議
二十六日　源義経公東下り行列保存会定期総会（法務宏紹　於滝沢魚店）
二十八日　讃衡蔵運営委員会
二十九日　平泉町観光審議会（執事長　於役場）
平泉文化観光振興基金運営委員会（執事長　於役場）
三十日　三千院門跡第六十三世門主小堀光實大僧正晋山披露宴（貫首　於ホテルグランヴィア京都）
◇**四月**
一　日　月次大般若（本堂）
二　日　天台宗陸奥教区仏教青年会リモート総会（執事長　於光勝院広間）
四　日　御修法「鎮将夜叉大法」（～十一日、貫首　於延暦寺）
七　日　ＩＢＣ岩手放送、ＪＲ盛岡支社、岩手県教育委員会、一戸町、岩手県南広域振興局訪問（東下り主要役者委嘱状伝達式並びに表敬訪問　執事長）
八　日　仏生会（本堂）
お経を読む会（円教院）
十二日　讃衡蔵運営委員会
十三日　春の藤原まつり交通警備会議（管財　於役場）
二十二日　西行法師追善法要（光勝院）
二十六日　桜友会清掃奉仕（北参道）
二十七日　一味戒院大僧正完俊大和尚（深大寺前住職）本葬儀（貫首　於調布市グリーンホール）
◇**五月**
一　日　春の藤原まつり開幕
藤原四代公追善法要（本堂）

稚児行列

二　日　開山護摩供（開山堂）
酒田三十六人衆田中勝己様来山
郷土芸能奉演（栗原　栗原神楽）
源義経公東下り行列主要者顔合わせ会（執事長　於武蔵坊）
三　日　郷土芸能奉演（衣川　川西念佛剣舞）
源義経公東下り行列（義経公役　伊藤健太郎）

四　日　古実式三番
半能「竹生島」
郷土芸能奉演（胆沢　朴ノ木念仏剣舞）
郷土芸能奉演（一関　行山流舞川鹿子躍）
国際興業会長小佐野隆正様来山
五　日　郷土芸能奉演（平泉　達谷窟毘沙門神楽）
六　日　山王講（本堂）
十　日　ウェーサカ仏教会総会（法務秀法　於一関松竹）
十四日　第二十四回仙台青葉能
「養老」狂言「栗焼」「枕慈童」
協力中尊寺（貫首、随行章興　於仙台電力ホール）
十五日　幕田魁心書展「奥の細道」（～二十二日、上段の間）
お経を読む会（円乗院）
十七日　一関警察官友の会役員会（執事長　於一関警察署）
十八日　中尊寺菊まつり協賛会総会（光勝院）
二十一日　富岡八幡宮宮司丸山聡一様来山（執事長）
二十二日　富岡八幡宮神饌田における御田植祭（執事長　於平泉町花立）
二十五日　平泉商工会通常総会（執事長　於平泉文化遺産センター）
二十八日　伝教大師最澄一二〇〇年魅力交流委員会様来山（執事長）
三十一日　第二百五十八世天台座主傳燈相承式ならびに祝賀会（貫首、執事長、随行亮王　於延暦寺根本中堂）

◇六月
一　日　月次大般若（本堂）
平泉観光推進実行委員会総会（執事長　於役場）
二　日　平泉芭蕉祭全国俳句大会実行委員会（執事長　於役場）
四　日　**伝教会**（御影供　本堂）
十二日　お経を読む会（真珠ノ澄円）
十三日　四寺廻廊法要（地蔵院、執事長、法務ほか　光勝院）
ウェーサカ祭典（法務　本堂）
十四日　最勝寺御尊住山田俊和師来山（戸津説法について　執事長）
十五日　平泉観光協会理事会（執事長）
十六日　讃衡蔵運営委員会
十七日　社会を明るくする運動平泉町推進委員会（執事長　於役場）
平泉町世界遺産推進協議会役員会（執事長　於平泉文化遺産センター）
二十日　自在房蓮光忌法要（本堂）
二十二日　川徳前代表取締役社長河村宗生氏お別れの会（円乗院　於ＨメトロポリタンホテルＮＷ）
二十九日　第六十一回**平泉芭蕉祭全国俳句大会**（於毛越寺）
平泉世界遺産の日平和の祈り（貫首、執事長、法務宏紹ほか　於旧観自在王院庭園）

◇七月
一　日　月次大般若（本堂）
平泉町学習交流施設「エピカ」開館式（執事長　於エピカ）
五　日　平泉町世界遺産推進協議会総会（総務澄円　於エピカ）
十　日　**法華経頓写経会**（光勝院）
北上川ＲＣＡ文化セミナー・総会（執事長　於Ｈ松の薫一関）
十六日　第十九回歴史・文化講座「青空説法」（講師円乗院、執事長　於和賀多聞院伊澤家）
平泉水かけ神輿宵宮祭（於旧観自在王院庭園）
富岡八幡宮神輿総代連合会様との交流会（貫首、執事長、随行五大　於武蔵坊）
十七日　**清衡公御月忌**（胎曼供　本堂）
平泉総社神輿渡御
二十一日　岩手県南歴史文化観光推進協議会（管財晋照　於平泉世界遺産ガイダンスセンター）
平泉町文化財調査委員会議（章興　於平泉文化遺産センター）
二十八日　桜友会清掃奉仕（開山堂）
三十一日　夏休み早朝坐禅会（本堂）

◇八月
一　日　月次大般若（本堂）
四　日　午後三時半　**〈平和の鐘〉**打鐘
七　日　夏休み早朝坐禅会（本堂）
十一日　夏休み早朝坐禅会（本堂）
十四日　第四十三回中尊寺薪能
狂言「孫聟」
能　「国栖」
十六日　第五十八回**平泉大文字送り火**
二十一日　戸津説法　前貫首山田俊和師（執事長聴聞　於東南寺）
二十三日　施餓鬼会御逮夜（本堂）
二十四日　**大施餓鬼会・放生会**（本堂）
二十五日　戸津説法聴聞（貫首、随行亮王　於東南寺）
二十六日　平泉町上下水道運営協議会（管財晋照　於役場）
二十八日　蜂神社例大祭（参拝秀厚　於紫波町同神社）

◇九月
一　日　月次大般若（本堂）
三　日　**泰衡公御月忌**（金曼供　本堂）
八　日　讃衡蔵運営委員会
十　日　五郎沼薬師神社秋季例大祭（法務宏紹　於紫波町同神社）
十七日　白符忌（本堂）
十九日　赤堂稲荷例祭（護摩供）
二十三日　秋彼岸会法要（常行三昧　本堂）
お経を読む会（釈尊院）
二十五日　奉納演奏（琴古流尺八一行　境内）
二十八日　平泉観光協会理事会（執事長）
二十九日　平泉観光推進実行委員会（執事長　於役場）
三十日　第四十二回**西行祭短歌大会**（講師坂井修一氏「現代短歌と西行」）

◇十月

一　日　月次大般若（本堂）
二　日　慈眼会（本堂）
　　中尊寺通りホコ天まつり開会式（参拝秀厚　於中尊寺通り）
五　日　群馬教区尋清寺髙橋美清様来山
　　第五十七回全国史跡整備市町村協議会大会一行来山（執事長挨拶）
十二日　東京国立博物館訪問（貫首、執事長、管財章興、晋照）
十六日　お経を読む会（法泉院）
十九日　龍興寺寛憲海師、会津美里クラブ衆様団参（瑠璃光院案内）
二十日　菊まつり開闢法要
二十五日　大館錦神社訪問（貫首、山田前貫首、藤里毛越寺貫主、晋照）
二十八日　**秀衡公御月忌**（金曼供　本堂）
二十九日　紅葉銀河（参道の紅葉を照らす～十一月十三日）
　　奉納演奏（久遠の鐘プロジェクト2022　かの一輪を拝受して　旧覆堂、三十日　経蔵前）

◇十一月

一　日　**秋の藤原まつり開幕**
　　藤原四代公追善法要
　　郷土芸能奉演（江刺　行山流角懸鹿躍）
二　日　お経を読む会（利生院）
　　郷土芸能奉演（栗原　栗原神楽）
三　日　中尊寺能「枕慈童」
　　謡・仕舞（二葉きらり園、一関喜桜会奉納　能舞台）
　　郷土芸能奉演（衣川　川西念佛剣舞／胆沢　行山流都鳥鹿踊／平泉　達谷窟毘沙門神楽）
五　日　秋期企画「経蔵法楽～声明の夕べ」（経蔵）
七　日　天台寺門宗総本山園城寺長吏拝堂式・就任の集い（貫首、随行亮王　於園城寺金堂・びわ湖大津プリンスホテル）
八　日　岩手県観光誘致説明会（総務亮王　於名古屋）
九　日　埼玉教区・布教師会合同研修会様団参（研修講師円乗院　於光勝院広間）
　　岩手県観光誘致説明会・岩手県教育旅行誘致説明会（～十一日、総務五大　於大阪）
十　日　写経奉納式（光勝院）
十二日　奉納演奏（弦楽四重奏Mカルテット　旧覆堂）
十五日　菊まつり表彰式（光勝院）
二十三日　天台会御逮夜（本堂）
二十四日　**天台会**（御影供　本堂）
　　秋期定例一山会議
二十五日　一関菊花会表彰式（管財晋照　於一関文化センター）

ご祈祷（きとう）・ご回向（えこう）のご案内

□　当山祈祷道場不動堂にて祈祷勤修いたします。不動明王御宝前にてご祈祷後、お札とお供物をお授けします。志納金は一願五千円よりお申し込みいただけます。

例　厄除開運　家内安全　當病平癒　商売繁昌　良縁成就
　　交通安全　学業成就　身体健全　受験合格　心願成就　等

□　本堂ご本尊丈六釈迦如来御宝前におきまして先祖供養、水子供養、東日本大震災物故者供養を勤修いたします。ご供養の証（あかし）として「追善殖福証（ついぜんしょくふくしょう）」をお渡し（不要の方は当山にて奉納）いたします。志納金は一件三千円より。

例　○○家先祖代々供養　○○○○居士（大姉）供養
　　○○家水子供養　東日本大震災物故者供養　等

※ご来山申し込みが難しい方は、ファックス等でもお申し込みいただけます。
※ご不明の点は、中尊寺事務局法務部までお問い合わせください。

TEL　〇一九一（四六）二二一一
FAX　〇一九一（四六）二二一六

ご祈祷札

殖福証

後記

▽　平泉芭蕉祭全国俳句大会、小澤實先生の講演録は、ひとつの文学作品というべき仕上がりとなりました。小澤先生誠にありがとうございました。読者のみなさま是非お読みください。

▽　奥山貫首が巻頭言に記されていましたが、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻をはじめとする世界各地の紛争や戦争が一日も早く終わることを誰しもが願う令和五年となりました。

▽　小誌発行にご協力いただいた方々に感謝申し上げます。

（北嶺澄照）

寺報『関山』は、中尊寺ホームページで閲覧が可能です。ぜひご利用ください（https://www.chusonjior.jp/）。

中尊寺〈寺報〉『関山』第二十八号
令和五年（二〇二三）二月十四日
発行　中尊寺
（執事長　菅原光聴）
〒〇二九―四一九五
岩手県平泉町字衣関二〇二
編集　中尊寺仏教文化研究所
印刷　川嶋印刷㈱

彫刻作品「Nihonkamosika」

菅原　年（記事48ページ）

〈発行　中尊寺〉